



始



特 233
407



慶應義塾大學編

語
教
程

卷一

慶應義塾出版局



前
篇



上海圖書館藏



國語教程 卷一

目次

前編

自國の獨立……………	福澤諭吉……………一
丹田法……………	白隱禪師……………四
道教……………	岡倉天心……………八
千鳥の香爐……………	幸田露伴……………二
笈の小文……………	松尾芭蕉……………六
俳句……………	三

川柳狂句	三六
陣屋	一谷嫩軍記.....四一
御殿	伽羅千代萩.....六〇
一字千金	菅原傳授手習鑑.....七九
近世和歌九三
毒酒を受太刀の身	武道傳來記.....九七
行水でしるる人の身の程	武道傳來記.....一〇九
世界の借家大將	日本永代藏.....一二五
見立てて養子が利發	日本永代藏.....一三〇
鼠の文づかひ	胸算用.....一三七
銀一匁の講中	胸算用.....一三三
漢學先生	浮世床.....一三九

言葉あらそひ.....浮世風呂.....呂.....一四

後編

枕草子抄	一五五
源氏物語「桐壺」・「帚木」・「夕顔」	二〇四

國語教程 卷一

自國の獨立

近來は世上に人民同權の説を唱ふる者多く、或は華士族の名稱をも廢して、全國に同權の趣旨を明にし、以て人民の品行を興起して、其卑屈の舊習を一掃せざる可からずと云ふ者あり。其議論雄爽、人をして快然たらしむと雖も、獨り外國の交際に就ては、此同權の説を唱ふる者少きは何ぞや。華士族と云ひ、平民と云ふも、等しく日本國內の人民なり、然るも、其間に權力の不平均あれば、尙且これを害なりとして、平等の地位に置かん事を勉めり。然るに今利害を別にし、人情を異にし、言語風俗面色骨格

に至るまでも相同じからざる、此萬里外の外國人に對して權力の不平均を患へざるは、抑も亦何の由縁なるや。咄々快事と云ふ可し。(中略)

今の外人の狡猾慥悍なるは、公卿幕吏の比に非ず、其智以て人を欺く可し、其辯以て人を誣ゆ可し、争ふに勇あり、闘ふに力あり、智辯勇力を兼備したる、一種法外の華士族と云ふも可なり。萬々一も、これが制御の下に居て束縛を蒙る事あらば、其殘刻の密なる事、恰も空氣の流通をも許さざるが如くして、我日本の人民は、これに窒塞するに至る可し。(中略)

抑も外人の我國に來るは、日尙淺し、且今日に至るまで、我に著しき大害を加へて、我面目を奪うたる事もあらざれば、人民の心に感ずるもの少しと雖も、苟も國を憂ふるの赤心あらん者は、聞見を博くして、世界古今の事跡を察せざるべからず。今の亞米利加は、元誰の國なるや、其國の主入たるインヂャンは、白人のために逐はれて、主客處を異にしたるに非ず

や。故に今の亞米利加の文明は、白人の文明なり、亞米利加の文明と云ふ可からず。此他東洋の國々及び大洋洲諸島の有様は如何。歐人の觸るゝ處にて、よく其本國の權義と利益とを全うして、眞の獨立を保つものありや。ペルシヤは如何。印度は如何。暹羅如何。呂床、呱哇は如何。サンドウキチ島は、千七百七十八年英のカピタン・コックの發見せし所にて、其開化は近傍の諸島に比して、最も速なるものと稱せり。然るに發見のとき、人口三四十萬なりしもの、千八百二十三年に至つて、僅かに十四萬を殘したりと云ふ。五十年の間に人口の減少する事、凡そ毎年百分の八なり。人口の増減には、種々の原因もあるべければ、姑く之を擱き、其開化と稱するものは、何事なるや。唯此島の野民が、人肉を喰ふの惡事を止め、よく白人の奴隸に適したるを指して云ふのみ。支那の如きは、國土も洪大なれば、未だ其内地に入込むを得ずして、歐人の跡は唯海岸にのみあ

りと雖も、今後の成行を推察すれば、支那帝國も、正に歐人の田園たるに過ぎず。歐人の觸るゝ所は、恰も土地の生力を絶ち、草も木も其成長を遂る事能はず、甚しきは其人種を殲すに至るものあり。是等の事跡を明かにして、我日本も東洋の一國たるを知らば、假令今に至るまで、外國交際に付き甚しき害を蒙りたる事なきも、後日の禍は恐れざる可からず。

——福澤諭吉 文明論之概略——

丹 田 法

白隱禪師は駿河の人、松蔭寺の住持たり、慧鶴又は鶴林と號す。明和五年歿す。年八十四。同六年勅して神機獨妙禪師の號を賜ひ、明治十七年勅諭正宗國師を賜ふ。三百年來の一大宗師にして、我國今日の禪

門、多くはこの人の系統に屬す。

寶永第七庚寅孟正中浣、竊に行纏あんてんを着け、濃東を發し、黒谷を越え、直に白河の邑に到り、包を茶店におろして、幽が巖栖の處を尋ぬ。里人遙に一枝の溪水を指す。即ち彼の水聲に隨て遙に山溪に入る。正に行くこと里許に、乍たちまち流水を踏斷す、樵徑も亦無し。

時に一老父あり、遙に雲烟の間を指す。黃白にして方寸餘なる者あり、山氣に隨て或は顯れ或は隠る。是れ幽が洞口に垂下する所の蘆簾なりと。予即ち裳を塞げて上る、巉巖を踏み蒙茸を披けば、氷雪草鞋を咬み、雲露のふえを壓す、辛汗を滴し苦膏を流して、漸く蘆簾の處に到れば、風致清絶實に物表に丁々たるを覺ゆ。心魂震ひ恐れ、肌膚戰慄す。

且しばらく巖根に倚りて數息する者數百、少焉しばらくありて衣を振ひ襟を正して、

畏づ／＼鞠躬して、簾子の中を望めば、朦朧として幽が目を収めて端座するを見る。蒼髮垂れて膝に到り、朱顔麗しく棗の如し。大布の袍を掛け、軟草の座に坐せり。窟中纔に方五六笏にして、全く資生の具無し、机上只中庸と老子と金剛般若とを置く。予則ち禮を盡して苦ろに病因を告げ、且つ救を請ふ……

至人は常に心氣をして下に充たしむ。心氣下に充つる時は、七凶内に動く事なく、四邪又外より窺ふこと能はず。營衛充ち、心神健かなり。口終に藥餌の甘酸を知らず、身終に鍼灸の痛痒を受けず。庸流は常に心氣をして上に恣にす、上に恣にする時は、左寸の火、右寸の金を尅して、五官縮り疲れ、六親苦しみ恨む。……

夫れ大道の外に眞丹なく、眞丹の外に大道無し。蓋し五無漏の法あり。備の六慾を去け、五官各其職を忘るゝ刻は、混然たる本源の眞氣彷彿とし

て目前に充つ。是れ彼の大白道人の所謂、我が天を以て事ふる所の天に合する者なり。孟軻氏の所謂、浩然の氣、是を率ゐて臍輪氣海丹田の間に藏めて、歳月を重ねて、是を守つて守一にし去り、是を養うて無適にし去つて、一朝乍ち丹竈を掀翻する刻は、内外中間、八紘四維、總に是れ一枚の大還丹。此時に當て、初めて自己即ち是れ天地に先ちて生ぜず、虚空に後れて死せざる底の、眞箇長生久視の大神仙なることを覺得せん。……

心勞煩する刻は、虚して心熱す、心虚する刻は、是を補するに、心を下して以て腎に交ふ。是を補といふ、既濟の道なり。公先に心火逆上して、此の重痾を發す。若し心を降下せずんば、縦ひ三界の祕密を行じ盡したりとも、起つことを得じ。……

夫れ觀は無觀を以て正觀とす。多觀の者を邪觀とす。向に公、多觀を以て此重症を見る、今是を救ふに無觀を以てす、亦可ならずや。公もし心炎

意火を収めて、丹田及足心の間にかば、胸膈自然に清涼にして、一點の計較思想なく、一滴の識浪情波無けん。是れ眞觀清淨觀なり。

——白隱禪師 夜船閑話——

道 教

揚子江は黄河の支流ではなく、黄河の岸邊に育まれたる就農鞭靷人の總てを把握する社會主義も、彼等の同胞たる綠河流域の人々を獲ることは出来なかつた。この綠河の大峽谷の奥深く、立ち入り難い森林や、霧に包まれた澤地には、北支那の周王朝に歸順せざる慄悍不羈の民族が住んでゐた。これら山間民族の族長は、封建時代に於ては、周の諸侯の會盟にも加はる事を許されず、その野卑な風貌と、北方民族が大鴉の嘎聲になぞらへた粗野な言語とは、漢の末期に至つても、尙嘲笑の種であつた。然し次第

に周文化に浸染して、これら南方民族も亦その愛憐の情や理想やを表現するところの——形式に於ては北方民族と大いに異なる——藝術發現の道を見出したのである。

老子は、楚の當時に於て南方に當れる所に生れたのであり、嘗て周の守藏の吏たりしこともあつた。その説く所の異つてゐたにも拘らず、孔子は老子を師として尊敬し、龍と呼んで「魚のよく遊ぶものなることを知り、鳥のよく飛ぶことは知つてゐたが、龍の力に至つては全く憶測することが出来ない」と言つた。老子の後繼者たる莊子は、老子の道を踏襲して、これを敷衍して、ものの相對性と形の變化にまで説き及ぼした。

儒教學派の聖人等の堅實なる努力を以てさへ、支那民族と共にその故郷から入り來れる鞭靷の迷信を根絶せしむる事は出来なかつた。揚子江流域の未だ斧鉞を加へられざる深森は、この好んで妖術魔術の邪教的物語を語

る原始的傳習を護つたのである。事實死後の生活を不問に附して、人間の持つ高尚なる要素は天に歸り、劣等なる要素は再びこの世に於て結合される、と説ける儒教必然の歸決も、亦それ自身肉體の不滅を穿鑿せるものであつた。

遠く周時代の文學に溯つても、亦我々は屢々、仙人—不思議な業を行ひ、仙藥を見出して不老不死の力を得、眞晝の空を鶴に跨つて飛び、その神秘な交友の秘密の集りに加つては日を送る—のこゝろを讀む。

秦の始皇帝は人を派して、東海に不老不死の藥を求めしめたが、空しく歸るを恐れた。その使臣等は日本に歸化し、その後裔は、今日に於て尙續いてゐると信じられてゐる。

—岡倉天心 岡倉天心全集—

千鳥の香爐

夕月夜海少し見ゆる木の間かな

(宗祇)

方丈の小室に天地の粹を凝らして、一爐の火香に心身の春を喚ぶ。茶伯の平生こそ、清らにして又物寂びたれ。閑庭塵なくして僅に落葉あり、徑の石露に濕ひて、苔微かに點せんとする、桐の下蔭、椎の葉越、海少し見ゆる夕月夜の幽趣を賞して、古鑑しづかに起る松の聲濤の音に、會心の笑を洩らす自點の興。詩にあらずして是詩、歌にあらずして是歌なり。

おもむろに獨詣の境地を拓き開いて、先哲未到のところ坐せんとす。床の花を觀て破顔する時は、迦葉の心を超え、羅國の香を聞いて肅然たる折は、香嚴童子の悟を探る。煩惱を斷ぜずして菩提を證する毘耶離の洒落をこゝに現じて、色香に没在するも、不背實相と、天台の立義を身に占めて體す。是佛にあらずして而も佛、祖にあらずして而も祖なり。

されば一字一句の推敲に、瘦男の肺肝を推くところ無けれ。一器一物の取捨には、風雅の心腎を揉みぬいて、長短高低の鹽梅に、切磋の思を鋭くすることは、聲調情意の苦勞に鍛錬の慮を焦がすと異ならで、彼には鬼才も血を嘔き、此には大匠も神を傷らんとす。彼の痛棒に肩胛を痛めて、熱喝に膽を破ることは無けれども、三更の雪に坐す僧堂裏の工夫、曉天の雲に勵む叩關の瓦礫、乾坤を坐斷し山河を拔擲する意氣は、これにもありて、一絲半縷の少しき差にも、肯はず肯はれざるあり、鷄啐雛啄、やゝ合せざれば、或は非とし、或は非とせらる。

茶漚たゞ軽く結べども、此の中に詩情と歌情とを結び、熱湯たゞ烈しく沸れども、其の間に佛意と祖意とを沸らす。李杜の腔子の裏には、凡鳥翔り入る能はず、李杜自から知るのみ。百丈雲門の頭顱の上をば、蒼蠅何ぞ能く瞰ん。百丈雲門も若くは自ら見ざらん。劣才の望は満ち易かれど、良

工は心常に苦む習ひ。

利休は先刻より獨り寂然として爐前に坐したるまゝ、少時動かず、眼はたゞ一つの少香爐に注がれたり。佗びておもしろき一室の中、清らなるのみにして、冗物無く、白玉椿潔よく白うして、床に一塊の雪言はんとす。花に風情あれど、主人顧みず、空は遊塵を絶ちて、晝悠々たり。垂簾日光を和めて、紙窓程好く明るき數寄屋に、舍きて復取り、取りて復舍き、眺めては味はひ、味はひては眺むる、香爐は何時の名工が造れる。釉色麗らかに匂ひて、碧穹の春の影を泛め、搏埴やすらかに生れて、妙手の靈の象を結び成せる、汲めども盡きぬ韻趣の溢れて、氣氳として騰る如く見ゆ。見らるゝ器、視る叟、他は無言の妙威を保ちて、自は不説の密意を含むに其も語らず、此も語らず、不斷の釜の沸音のみ、浙江潮衰へて、濤やうやく收まらんとするの響を曳けり。

廬山煙雨浙
江潮未到千
般恨不消到
得歸來無別
事廬山煙雨
浙江潮

(東坡)

時に通ひの口の襖ふすま音しづかに明きて、利久が妻やをら席に入り來りぬ。鴛鴦既に老いたれども、猶共に一水を守り、松柏變らず能く互に同色を契る。夫婦の姿、今ははや枯びたれど、優婆塞、優婆夷、情更に眞なり。何事に御心を然のみは潜ませたまひて、少時は御聲だに爲させたまはざりつる、と問ふ。香露はなしろ翻に墜ちて、鶴の夢搖らぎ、微風巖をおとづれて、蘭かすかに點頭うなづき、事と云ふ可き事もなければ、今朝人の得させつる、此の香爐を視て、といふ。

一啜味を解す可し、七碗古人おろかなり。夫の言葉ことばを聞くとひとしく、宗恩は早く眼を香爐に留めて、春の宵、淡き星の光の花の梢をそと摩づる如く、いと柔らかに打瞻うちまりたり。二人が間に香爐一個、青磁の碧の中に、四の眼の波寄りて、溶けて一體の形の上に、双ふたつの心纏まつりて駐まる。左視右視して一霎しほらく時を経しが、雪は午ひるにして草の緑見はれ、水は冬にして石の

白出づ。言説無きが裏に、神會の通ずる有り。

宗恩、面を轉じて夫の方を見、袖と申し形と申し、心よき作にこそ、されど此の脚の、一分を高過ぐると見たまへるにはあらずや、一分高さやうに見えて、といふ。正に痒處に觸着す麻姑まこの爪。

爾そのとき時利休おのづからに笑みて、爾そなたも然思ふか、我も然は思ひつる。一たび用きらせては、復續がせん術なければ、此の工人の技を愛惜みて、少時躊躇ちゆうじゆひけるが、まことに一分過ぎたりといふ。一分なり、たゞ一分なり、知らざるものは言ふに足らずとせんも、金針の腫に臨む毫釐の差を争ひ、庖丁の刃を遊ばしむる、唯ただ玄微えんびの間なり。

甘きも非、鹹しほきも非、易牙の魂は、甘鹹の和を尋ぬるに苦みて、遅きも敗、速きも敗、韓信が心は、遲速の適を圖るに煎らる。三百餘處、處々皆石を下す可きも、碁聖の石を下す、必ず處を同じうす。極致唯一有り、妙

着畢に二無し。利休も笑へば、宗恩も笑み、花は無くても薄霞、山と川とに春渡る。何とは無しの温かさ。老の妹脊の濁無き、仲美はしう明るうて、解いて解かるゝ心と心。然らば玉師に磨らせませうと、器は終に一分磨られぬ。孔明、周瑜掌を開けば、同じ火字なり。一分違はぬ趣味の眼の高さと高さと、相會うたる夫なりけり、婦つまなりけり。

——幸田露伴 洗心録——

笈の小文

百骸九竅の中に物あり、かりに名付て風羅坊と云。誠にうすものゝ風に破れやすからんことを云にやあらん。かれ狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごとゝなす。或時は倦て放擲せんことをおもひ、ある時はすゝんで人にかたん事をほこり、是非胸中にたゝかうて、これが爲に身安から

ず。しばらく身を立てんことをねがへども、これがためにさへられ、しばらく學で愚をさとさん事を思へども、是がために破られ、終に無能無藝にして只此一筋につながる。西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休の茶における、其貫通するものは一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずと云ふことなし。おもふ處月にあらずと云ふことなし。思ひ花にあらずる時は夷狄にひとし。心花にあらずる時は鳥獸にたぐひす。夷狄を出て、鳥獸をはなれて、造化にしたがひ造化にかへれと也。

神無月の初、空さだめなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、

旅人とわが名よばれん初しぐれ

また山茶花を宿々にして

岩城の住、長太郎と云もの、此脇を付て其角亭において關送りせんとも

てなす。

時は冬よし野をこめん旅のつと

此句は露沾公より下し給らせ侍りけるを、はなむけのはじめとして、舊友・親疎・門人等、あるは詩歌・文章をもて訪ひ、或は草鞋の料を包て志を見す。かの三月の糧をあつむるに一芥の力を入す。紙衣・綿子など云もの、帽子したうづやうのもの、心々に贈りつどひて、霜雪の寒苦をいとふに心なし。或は小舟をうかべ、別墅に設けし草庵に酒肴たづさへ来てゆくへを祝し、名残を惜みなどすること、故ある人の首途するにも似たりと、いと物めかしく覺られけれ。

そもく、道の日記と云ものは紀氏・長明・阿佛の尼の文をふるひ、情を盡してより餘はみな倣似かよひて、其糟粕をあらたむることあたはず、まして淺智短才の筆に及ぶべくもあらず。其日は雨降晝よりはれて、そこ

に松あり、かしこに何と云川ながれたりなど云こと、たれくも云べく覺侍れども、黄奇・蘇新のたぐひにあらずば云ことなかれ。されども其處其處の風景心に残り、山館・野亭の苦しき愁も、且は嘶の種となり、風雲のたよりとも思ひなして、わすれぬ處く跡や先やと書集め侍るぞ、猶醉るもの、慄語にひとしく、いねる人の讒言するたぐひに見なして、人また亡聽せよ。

鳴海にとまりて

星崎のやみを見よとや啼千鳥

飛鳥井雅章公の此宿にとまらせ給ひて、都も遠くなるみがたはるけき海を中にへだて、と詠じ給ひけるをみづからか、せ給ひて、賜りけるよしをかたるに、

京まではまだ半空や雪の雲

みかはの國保美と云處に、杜國が忍びて在けるを訪んと先越人に消息して、鳴海より跡ざまに二十五里尋ね歸りて、其夜よし田に泊る。

寒けれど二人寝る夜ぞたのもしき

あまつ繩手、田の中にほそ道ありて、海より吹上る風いと寒き處なり。

冬の日や馬上に氷るかけぼうし

保美村より伊良古崎へ一里ばかりも有べし。三河國の地つゞきにて、伊勢とは海隔たる處なれども、いかなる故にか、萬葉集にはいせの名所の中にえらび入られたり。此洲崎にて基石を拾ふ。世にいらこしると云とかや。骨山と云は鷹を打處也。南の海のはてにて、鷹のはじめてわたる所と云り。いら古鷹など歌にもよめりけりと思へば、なをあはれなる折ふし、

鷹ひとつ見つけてうれしいらこ崎

熱田御修覆

磨直す鏡も清し雪の花

蓬左の人くむかへとられて、しばらく休息するほど

箱根こす人もあるらしけさの雪

ある人の會

ためつけて雪見にまかる紙衣哉

いざゆかん雪見にころぶ處まで

或人興行

香を採る梅に藏見る軒端哉

此間美濃大垣・岐阜のすきもの訪ひ來りて、歌仙、あるは一折など度度に及ぶ。

師走十日餘り、名護屋を出て舊里に入んとす。

旅ねして見しや浮世の煤はらひ

二三

桑名よりくはで來ぬればと云。日永の里より馬かりて杖つき坂のぼる
ほど、荷鞍打かへりて馬より落ぬ。

かちならば杖つき坂を落馬かな

と物うさの餘り云出侍れども、終に季の詞入ず。

古さとや臍の緒に泣としのくれ

宵の年空の名残をしまんと酒飲夜ふかして、元日寝わすれたれば、

二日にもぬかりはせじな花の春

初 春

春立てまだ九日の野山かな

枯芝ややゝ陽炎の一二寸

伊賀國阿波庄と云所に俊乗上人の舊跡あり。護峰山新大佛寺とかや云。

名ばかりは、千歳のかたみとなりて、伽藍は破れて礎を残り、坊舎は絶て
田畑と名のかはり、丈六の尊像は苔のみどりに埋れて、みぐしのみ現然と
をがまれさせ給ふに、上人の御影はいまだ全くおはしまし侍るぞ、其代の
名残うたがふ處なく涙こぼるゝばかり也。石の蓮臺・獅子の坐などは蓬葎
の上に堆く、双林の枯たる跡もまのあたりにこそおぼえられけれ。

丈六に陽炎高し石の上

故主蟬吟公の庭にて

さまざまの事おもひ出す櫻かな

伊勢山田

何の木の花とはしらずにほひかな
裸にはまだきさらぎのあらし哉

菩提山

二三

此山の悲しさ告よ野老ほり

龍尚舎

物の名をまづとふ蘆のわかば哉

網代民部雪堂に會

梅の木になをやどり木や梅花

草庵會

芋植て門は律のわかばかな

神垣のうちに梅一木もなし。いかに故有ことにやと神司などに尋侍れば、只何とはなしおのづから、梅一本もなく、子良の館のうしろに、一もと侍るよしをかたり傳ふ。

お子良子の一もとゆかしうめの花

神垣やおもひもかけす涅槃像

やよひ半過るほど、そとろにうき立心の花の我を道びく枝折と成て、芳野の花におもひ立んとするに、かのいら古崎にて契り置し人の伊勢にて出むかひ、俱に旅ねのあはれをも見、且はわが爲に童子と成て、道のたよりにもならんとみづから万菊丸と名を云。まことにわらべらしき名のさま、いと興あり。いでや門出のたはぶれごとせんと笠の内に落書す。

乾坤無住同行二人

よし野にて櫻見せうぞ檜木笠

よし野にて我も見せうぞ檜木笠

万菊丸

旅の具おほきは道のさはりなりと物みなはらひ捨てたれども、よるの料にと紙衣ひとつ合羽やらの物・硯・筆・紙・薬等、晝筥など物に包て、うしろにせおひたれば、いとと臆よわく力なき身の跡さまにひかふるやうにて、道なをすゝまず、只ものうき事のみ多し。

草臥て宿かるころや藤のはな

はつ瀬

春の夜や籠人ゆかし堂のすみ
足駄はく僧も見えたり花の雨

万菊

葛城山

猶見たし花にあけゆく神の顔

三輪

多武峰

躰峠

多武峰より龍門へこえる道也

雲雀より空にやすらふたふげかな

龍門

龍門の花や上戸の土産にせん

酒のみにかたらんかゝる瀧の花

西河

ほろくくと山ぶさちるか瀧のおと

蜻蛉の瀧・布留の瀧は、布留の宮より二十五丁山のおくなり。布引の瀧。

津の國幾田の川上にあり。大和箕面の瀧勝尾寺へこえる道にあり。

櫻

さくら狩きどくや日々に五里六里

日は花に暮てさびしやあすならう

扇にて酒くむかけや散さくら

苔清水

春雨の木下につたふしみづかな

よし野の花に三日とどまりて、明ぼの・たそがれのけしきにむかひ、有
明の月のあはれなるさまなど、心にせまり胸にみちて、或は攝政公の詠に
うばゝれ、西行の枝折にまよひ、かの貞室がこれはこれとはと打なぐりたる

に、我いはんこと葉もなく、いたづらに口を閉たるいと口をし。思ひ立
たる風流いかめしく侍れども、こゝに至て無興のことなり。

高野

父母のしきりに戀しきじの聲

散花にたぶさはづかし奥の院

万菊

和歌

行春に和歌の浦にて追付たり

紀三井寺

跪はやぶれて西行にひとしく、天龍のわたしを思ひ、馬をかる時はいき
まきし聖のこと心にうかぶ。山野・海濱の美景に造化のたくみを見、ある
は無依の道者の跡をしたひ、風情の人の實をうかぶ。猶、栖を去て器物
のねがひなし。空手なれば途中のうれひもなし。寛歩駕にかへ、晚食肉よ

りもあまし。泊まるべき道にかぎりなく、立べき朝に時なし。只一日の願
ひ二のみ。こよひよき宿からん、草鞋の我足によるしきをもとめんとばか
りは、いさゝかの思ひ也。時々氣を轉じ、日々に情をあらたむ。もしわづ
かに風雅ある人に出あひたるよろこびかぎりなし。日頃は古めかしく、か
たくなゝりとにくみ捨たるほどの人も邊土の道づれにかたりあひ、はに
ふ・葎のうちにて見出したるなど、瓦石の中に玉を拾ひ、泥中にこがねを
えたる心地して、物にも書付、人にもかたらんとおもふぞ又これ旅のひと
つなりかし。

更衣

ひとつ脱でうしろにおひぬころもがへ

よし野出て布子賣たしころもがへ

万菊

灌佛の日は奈良にて爰かして詣侍るに、鹿の子をうむを見て、此日にお

いてをかしければ、

灌佛の日に生れあふ鹿子かな

招提寺鑑眞和尚來朝の時、船中七十餘度の難をしのぎ給ひ、御目の中沙
風吹入て、終に御眼盲させ給ふ尊像を拜して、

わか葉して御目のしづくぬぐはゞや
舊友に奈良にてわかる。

鹿の角まづ一ふしのわかれかな
大阪にてある人の許にて。

燕子花かたるも旅のひとつかな

須磨

月はあれど留主のやうなり須磨の夏

月見ても物たらずや須磨の夏

卯月中頃の空も朧に残りて、はかなきみじか夜の月もいと艶なるに、
山はわかばにくろみかかりて、時鳥啼出づべき東雲も、海の方よりしらみ
そめたるに、上野とおぼしき所は麥の穂なみあからみあひて、漁人の軒ち
かきけしの花のたえぐゝに見わたさる。

海士のかほまづみらるゝやけしの花

東須磨・西須磨・濱須磨と三處にわかれて、あながちに何わざするとも
見えず。もしほたれつゝなど歌にも聞え侍るも、今はかゝるわざするなど
も見えず。きすぐと云魚をあみして、眞砂の上に千ちらしけるを、鳥の飛
來りてつかみ去る。これをにくみて弓をもておとすぞ海士のわざとも見え
ず。もし、古戦場の餘波をとめてかゝる事をなすにやといと罪深く、
なを昔の戀しきまゝに、鐵拐が峰にのぼらんとする、道びきする子のくる
しがりて、とかくいひまぎらはすをさまぐゝにすかして、禁の茶店にて物

くらはすべきなどいひて、わりなき體に見えたり。かれは十六と云けん、里の童子よりは四ツばかりも、弟なるべきを、數百丈の先達として、羊腸嶮の岩根をはひのぼれば、すべり落ぬべきことあまた、び也けるを、つづし根笹にとりつき、息をきらし、汗をひたして、漸雲門に入こそ心許なき導師の力なりけらし。

須磨の海士の矢先に啼やほととぎす

時鳥さえゆく方や鳥ひとつ

須磨寺やふかぬ笛きく木下闇

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

かゝる處の秋なりけるとかや。此浦の實は秋を宗とするなるべし。悲しさ、淋しさ、いはんかたなく、秋なりせばいさゝか心のはしをも云出べき

ものをとおもふぞ、我心匠の拙きをしらぬに似たり。淡路島手にとるやうに見えて、須磨・明石の海左右にわかる。吳楚東南のながめも斯る處にや。物しれる人の見侍らば、さまざまのさかひにも思ひなぞらふるべし。又うしろの方に山を隔て、田井の畑と云處、松風村雨の古里といへり。尾上つゞき丹波路へかよふ道あり。鉢伏のぞき、逆落などおそろしき名のみ残て、鐘掛松より見下すに、一の谷内裏屋しき目の下に見ゆ。其代のみだれ其時のさわぎ、さながら心にうかび佛につどひて二位の尼君、皇子をいだきたてまつり、女院の御裳に御足もたれ、船屋形にまろび入らせ給ふみありさま、内待・局・女孺・曹子のたぐひ、さまざまの御調度もてあつかひ、琴・琵琶など、しとね・蒲團にくるみて船中になげ入、供御はこぼれて、うろくづの餌となり、櫛笥はみだれて海士の捨草となりつゝ、千歳のかなしび此浦にとゞまり、素波の音にさへ愁おほく侍るぞや。

俳句

元朝の見るものにせん富士の山
手をついて歌申しあぐる蛙かな
飛梅や軽々しくも神の春
里人のわたり候か橋の霜
世の中や蝶々とまれかくもあれ
鳳凰も出でよのどけき酉の歳
梅若菜鞠子の宿のとろろ汁
奈良七重七堂伽藍八重櫻
五月雨の雲吹き落せ大井川

宗鑑
守武
宗因
貞徳
芭蕉

五月雨のふりのこしてや光堂
一聲の江に横たふやほととぎす
粽結ふかた手にはさむ額髪
塚も動けわが泣く聲は秋の風
白菊の目に立てて見る塵もなし
鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春
文七に踏まるな庭の蝸牛
うづくまる薬のもとの寒さかな
交りは紙衣の切をゆづりけり
動くとも見えで畑打つ男かな
木枯の地にも落さぬ時雨かな
下京や雪つむ上の夜の雨

其角
文草
去來
凡兆
三五

涼しや朝草門に荷ひこむ
梅をちこち南すべく北すべく
瀧口に燈を呼ぶ聲や春の雨
寂として客の絶間の牡丹かな
心太さかしまに銀河三千尺
秋立つや素湯香しき施薬院
秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者
湖の水かたぶけて田植かな
まさご路やかげろふを追ふ波頭
風下の黄檗寺や麥ほこり
ともしびに氷れる筆をこがすかな
馴れて出る鼠のつらや小夜砧

三六

燕村

几董

大魯

太祇

春深し伊勢をもどりし一在所
紙漙の手許に散るや春の雪
枯蘆の日に日に折れて流れけり
鶯のほうと覗くや花御堂
下谷一番の顔して衣更
露の世は露の世ながらさりながら
これがまあつひのすみかか雪五尺
松蔭に寝て喰ふ六十餘州かな
をととひの糸爪の水もとらざりき
政宗の眼もあらん土用干
槍立てて通る人無し花芒

闌更

一茶

子規

三七

川柳狂句

鹽からたらひへ歸る五十年
醫者衆は辭世をほめて立たれけり
孝行はかじつた臍をさすつてる
親は子のために隠してためるなり
孝行のしたい時分に親はなし
泣きながらまなこをくばる形見わけ
賣家と唐様で書く三代目
功成り名遂げて櫻ひんぬかれ
二度目には與一もこまる扇かな
饅頭を一つ残してにらみ合ひ

御馳走を食はせて住持さてといひ
大男惣身に智恵がまはりかね
小男は小男ほどの小分別
つまらぬといふはちひさな智恵袋
鶯がよければ籠に欲が出る
かみなりを真似て腹掛やつとさせ
子煩惱抱くまでにして泣出され
神代にもだます工面は酒がいり
うたゝねの顔へ一冊屋根を葺き
花の朝寶永山を下女つくり
失念といへば立派なものわすれ
手について歌申上ぐる蛙かな

口あけてはらわた見せる蛙かな
 清盛の醫者はだかて脈をとり
 拜領の頭巾梶原ぬひちぢめ
 芭蕉翁ぼちやんといふと立留り
 夕立や十二字たすと降つてくる
 石山で出来た書物のやはらかさ
 頼政の三位はほんの拾ひもの
 青砥にて相模守を磨ぎあける
 碎けてもわれても定家百へ入れ
 心無き身は味噌をする西行忌
 西行も野郎のときは北を向き
 白川の名歌能因くろくなり

井戸ばたの櫻でお秋名が高し
 源左衛門鎧を着ると犬が吠え
 義貞の勢はあさを踏みつぶし

陣屋

行空も、いつかはさえん須磨の月、平家は八島の浪にたゞよひ、源氏は花の盛を見る。中に勝
 れて熊谷が、陣所は須磨に一構、要害厳しき逆茂木の、中に若木の花盛、八重九重も及びなき、
 それかあらぬか人ごとに、熊谷櫻といふぞかし。花をらせじとの制札を、讀で行人讀めぬ人、一つ
 所に立集り、詞扱も咲たり。花より見事な此制札、辨慶殿の筆じやげな。扱も見事一つも
 讀ぬ。ヲ、あれはの、義經様が此花を惜み、一枝きらば指一本、切るべしとの法度書、ヤア花の
 かはりに指きろとは首切下地。ヲ、こはや、見てゐる中も虎の尾を踏む心地する皆ござれと、花
 ひの嵐の臆病風、ちりぢりにこそ別れ行。はるくくと尋て爰へ熊谷が、妻の相模は子を思ひ、夫思
 堤の軍次立出て、是はく奥様か、詞ヲ、軍次そなたも息災さうな、マアめでたい。熊谷殿
 や小次郎もかはる事はないかの、早う逢たい逢せてたも。ハア旦那は今日御廟參、小次郎様は先
 頃より御前勤で御下りなし。マアく長の御旅路、お勞をお休めと、挨拶とりくくなる所へ、敦盛
 卿の御母藤の局、虎口の難を遁れきて、こけつ轉びつ花のかけ、陣屋をめぐり走着、詞跡より追

手のかゝる者、かげを隠して給はれと、けはしき體に驚て、相模は傍へ走寄、見るに見かはす互の顔、詞ヤアお前は藤のお局様ではないか、そういやるそなたは相模じやないか、テモ久しやなつかしや。お床し様やと手を取て、マアこなたへと伴ひ入、したしき體に心をきかし、軍次は勝手へ入にけり。相模はやがて手をつかへ、詞誠に一昔は夢と申が、大内に御座遊ばす時、勤番の武士佐竹次郎殿と馴初、御所を拔出で東へ下り、折柄御懐胎の御前様のお身の上お案じ申して居りました、お前様は平家の御家門參議經盛様の奥方様、其折は世盛の平家、御威勢はますくと、かげながら悦びましたに、此度源平のたゝかひ、御一門もちりゝと聞に付、ア、此藤の方様は何となされたどう遊ばした、と一人苦にしてをりましたに、マア御機嫌なお顔を見て、おめでたやお嬉しや。マ、そなたも無事で、マア嬉しい。懐胎で出やつた時の子は、姫ごせか男か。息炭で育て居るか、ちよつと寄ても女同士、問つとはれつ年月に、つもる言の葉くりかへし、嬉し涙の種ぞかし。藤の方涙ぐみ、世の盛衰はせひもなや。其時に産落したは、無官の太夫敦盛迎、器量發明揃うた子を、今度の軍に討死させ、夫は八島の波に漂ひ、我のみ残るうきなんぎ、淺ましの身の上と、かこち給へば、詞お道理、以前の御恩も有、連合にも語り、お身の片付後世の營、お心任せに致しませう、以前は佐竹次郎と申て、北面同然の武士、只今にては武藏國の住人、志の黨の旗頭、熊谷次郎直實と、人もしつた侍と、聞より御臺は、詞ヤアそなたの連合の佐竹の次郎、今では熊谷次郎といふか。アイ、すりやあの熊谷の次郎はそなたの夫よな、ハアはつと吐胸の氣をしつめ、詞何と相模、以前大内にて不義顯はれ、佐竹次郎と諸共に、禁獄させよとの院宣、自が申宥め御所の御門を、夜の内に落してやつたを覚えてか。アッ其時の御恩、何の忘れませうぞいな。ム、其恩を忘れずば、助太刀してそちが夫熊谷を、自に討したも。エ、イそりや又何のお恨で。サア最前も咄した、無官の太夫敦盛を、そちが夫熊谷が討たはいの。エ、そりやまや誠でござりますか。スリヤそなたは何にもしらぬか。サアはるんと東より、今來て今の物語、聞てとむねの誠しからず、追付夫が歸り次第、様子を尋る其間、暫くお扣へ下されと、詞を盡し

理を盡し、なだむる折に表より、詞梶原平次景高、所用有て推參と、呼はる聲。ヤア何梶原とや、見付られてはお身の大事、先々こちへと御臺の手を取、一間へ伴ふ其中に、堤の軍次立出、今日は主人直實、志有て廟參、御用あらば某に、仰置れ下されと、地に鼻付れば平次景高、何熊谷殿は他行とな、ソレ家來共、其石屋の親仁め引立來かれ。はつと答て科もなき、白毫のみだ六を、平次が前に引据れば、詞ヤイなまくら親仁め、儕何者に頼れ、敦盛が石塔は建たやい、平家は残らず西海へぼつくだし、誂ゆべき相手なければ、察する所源氏方の二股武士が、頼みしに違ひは有まい、サア眞直に白狀ひろげ、偽ると鉛の熱湯、背骨をわつて流し込と、おどしかけても正相一遍、詞テモ扱も御無理な御詮議、先程も申した通、石塔の誂人は敦盛の幽霊、五りんの事は扱置、一りんも手附はとらず、建ると其儘石塔の喰逃、せめて人魂でも手附に取たら、小提燈の代りに致しませうに、冥途へ書出しはやられず、本の是がそんしやうほだい、有やうの申上、願以此功德施一切、此通りでござりますると、取じめなき。詞ア、何おつしやつても糠に釘と、軍次が詞に平次は悪智恵、詞大かた石塔を建させたわろも合點々々、熊谷戻らば三つ鐵輪の詮議、先そやつめを引立來れと、一間へ入ば家來共、石相模は障子押ひらき、日も早西に傾しに、夫の歸りの遅さよと、待間程なく熊谷次郎直實、花の盛の敦盛を、討て無常を悟りしか、追に猛き武士も、物の哀を今ぞしる。思ひを胸に立歸り、妻の相模を尻目にかけて座に直れば、軍次はやがて覆になり、詞先達て平次景高殿、何か詮議の筋有とて、御影の石屋を引連御出有、奥の一間に御

待と、委細を述べれば、ムッ詮議とは何事ならん、アいや其方は一献を催し、梶原殿を饗申せ、サア早くいけ、く、ハテ扱何を猶豫すると、呵ちらされ是非なくも、相模に顔を見合して、心を残し入にけり。跡見送りて熊谷は、詞コリヤ女房、其方は爰へ何しに來た、國元出立の節、陣屋へは便も無用と、堅云付置たるに、詞を背くといひ剩へ女の身で、陣中へ來る事、不届至極の女めと、不興の體に相模は、もぢく、其お呵を存ながら、どうかかうかと案じるは、小次郎が初陣、一里いたら様子がしれうか、五里來たら便があるかと、七里歩十里歩、百里餘りの道をついで都迄、ホホホアしんき、登つて聞ば一の谷とやらで、今合戦の最中と、取々の噂ゆへ、子に引されるは親の因果、御了簡下さりませ。詞マア此小次郎は息災で居ますかと、とへば熊谷詞をあらゝげ、戰場へ赴からは命はなき物、堅固を尋る未練な性根、若討死したら何とする。いゝえいな、小次郎が初陣に、よき大將と

引組で、討死でも致したら、嬉しい事でござんしよと、夫の心に随ひし、健氣な詞に、顔色直し、詞ムム先小次郎が手柄といふは、平山の武者所と争ひ、拔がけの高名、軍門にかけ入ての働、手疵少々負たれ共、末代迄家の譽、エエして其手疵は、急所ではござりませぬか。ソレまた手疵を悔む顔付、若急所なら悲しいか。イエ何のいな、かすり疵でも負程の働は、出かしたと思つて、嬉しさの餘りお尋、其時お前も小次郎と、一所にお出なされたか。詞ホウ危しと見るより軍門にかけ入、小次郎をむりに引立、小脇にひんだき、我陣屋へ連歸り、某は其軍に搦手の大將、無官の太夫敦盛の首取たりと、咄しに扱はと驚相模、後に聞る御臺所、我子の敵と有あふ刀、詞熊谷やらぬと拔所、鑑擱んで、ヤア敵呼はり何やつと、引寄るを女房取付、詞アアこれく聊爾なされな、あなたは藤の御局様と、聞て直實恟りし、ハア思ひがけなき御對面、と飛退敬ひ奉れば、詞コリヤ熊谷、軍

のならひとは云ながら、年はも行ぬ若武者を、ようむごたらしう首討たな、サア約束じや相模、助太刀して夫を討せ、何とくと、刀追取せり付給へば、アイあいくと返事も胸にせまりながら、詞エエこれ直實殿、敦盛様は参議のお胤としりながら、どう心得て討しやんした、様子が有らう其譯をと、いふもせつなきをろく涙、詞アアおろかく此度の戦ひ、敵と目ざすは平家の一門、敦盛は扱置、誰彼と鎧を削るに、用捨がならうか、イヤノウ藤の御方、戦場の義は是非なしと、御諦下さるべし、其日の軍の有増と、敦盛卿を討たる次第、物語らんと座を構、扱も去六日の夜、早東雲と明る頃、一二を争ひ抜がけの、平山熊谷討取と、切て出たる平家の軍勢、中に一際勝れし緋威、さしもの平山あしらひ兼、濱邊をさして逃出す、詞ハテ健氣なる若武者や、逃る敵に目なかけそ、熊谷是に扣へたり、返せ戻せ、ツライおいと、扇を持って打招けば、駒の頭を立直し、波の打物二

打三打、いでや組んと、馬上ながらむんづと組、兩馬が間にどうと落、詞アア何と、其若武者を組敷てか、されば御顔をよく見奉れば、かね黒々と細眉に、年はいさよふ我子の年ばい、定て二親ましまさん、其歎はいか計と、子を持たる身の思ひの餘り、上帯取て引立、塵打はらひ、早落給へ、詞とすめさしやんしたか、そんなら討奉るお心ではなかつたの、ツア早落給へとすむれど、イヤ一旦敵に組しかれ、何面目にながらへん、早首取れよ熊谷、ナニ首取れというたかいの、健氣な事をいうたなう、サア其仰にいと猶、涙は胸にせき上し、まつ此通に我子の小次郎、敵に組れて命や捨ん、あさましきは武士の、ならひと太刀も抜き兼しに、逃去たる平山が、後の山より聲高く、詞熊谷こそは敦盛を組撃ながら助るは、二心に極りしと、呼はる聲々、エエ是非もなや、仰置る、事あらば、云傳へ参らせんと、申し上れば、御涙をうかめ給ひ、父は波濤へ赴給ひ、心にかゝる

は母人の御事、きのふにかはる雲井の空、定なき世の中を、いかゞ過行給ふらん、みらいの迷ひは一つ、熊谷頼の御一言、是非に及ばず御首をと、咄す中より藤の局、ナフ左程母をば思ふなら、經盛殿の詞に付、なぜ都へは身を隠さず、一の谷へは向ひしぞ、健氣によろうた其時は、母も俱々悦んで、すすめてやりしかはいやな、覺悟の上も今さらに、胸もせまりて悲しやと、くどき歎かせ給ふにぞ、御尤とは思へ共、相模は態と、聲はげまし、詞イヤ申しお局様、御一門残らず八島の浦へ落行給ふ、中に一人踏とゞまり、討死なされた敦盛様、數萬騎に勝れた高名、但迯のび身を隠し、人の笑ひを受給ふが、おまへの氣では嬉しいか、御未練な御卑怯など、いさめに熊谷、詞ヲフでかした、ノ、コリヤ女房、御臺所此所に御座有てはお爲にならぬ、片時も早く何方へも御供せよ、サア早くいけ、我も敦盛の御首實檢に備へん、軍次はをらぬか早參れと、呼はる聲と諸共

に、一間へこそは入相の、鐘は無常の時を打、陣屋の灯火に、いと悲しさ藤の方、アア思ひ出せばふびんやな、今はの際迄も肌身はなさず持たるは、コレ此青葉の笛、我と我身の石塔を、建て貰うた價にと、渡し置た此笛の、我手に入しも親子の縁、魂魄此世に有ならば、なぜ母にはま見へぬぞ、聞へぬ我子やなつかしの此笛やと、肌かたみに付身に添て、盡せぬ思ひやるせなき。調コレ申其笛がよい御篋、經かたみだらにより笛の音を、手向るが直に追善、敦盛様のお聲をば、聞と思つて遊ばせと、すゝめに隨ひ藤の方、涙にしめす歌口も、ふるうて音をぞすましける。親子の縁のなやにや、障子にうつるかげろふの、姿は慥敦盛卿、藤の局は一目見るより、ヤレなつかしの我子やと、かけ寄給ふを相模は抱とめ、香の煙に姿を顯はし、實方は死て再び都へ歸りしも一念のなす所、有まい事にはあらね共、いぶかしき障子のかげ、殊に親子は一世と申せば、御對面遊ばさば、御姿は消失せ

ん、イヤなう四十九日が其間、魂中有に迷ふと聞、せめては逢て一言をと、ふりはなし、障子ぐわらり明給へば、姿は見えず緋威の、鎧計を残りける。はつと計に藤の方、相模も俱に取付て、扱は鎧のかけなるか、戀しと迷ふ心から、お姿と見えけるかと、俱にこがれて正體も、泣くどくこそ哀なれ。時刻移ると次郎直實、首桶携へ立出れば、相模は夫の袂を扣へ、詞コレ申是が親子御一生のお別れ、せめて御首になり共、御暇乞と願ふにぞ、藤の局も涙ながら、ノウ熊谷、そちも子の有身でないか、野山の猛獸さへ子を悲しまぬはなき物を、親の思ひを辨へて、情に一目見せてたもと、縋り歎かせ給へ共、詞イヤ實檢に備へぬ中、内見は叶はぬと、はね退突退行所に、詞ヤア熊谷暫しく、敦盛の首持參に及ばず、義經是にて見ようずるはと、一間をさつと押ひらき、立出給ふ御大將、ハハハはつと次郎直實、思ひ寄ねば女房も、藤の局も諸共に、呆れながらに平伏す。義經席に

着給ひ、詞ヤア直實、首實檢延引といひ、軍中にて暇を願ふ汝が心底いぶかしく、密に來りて最前より、始終の様子は奥にて聞、急ぎ敦盛の首實檢せんと、仰を聞より熊谷は、はつと答走出、若木の櫻に立置し、制札引拔恐れなく、義經の御前に指置、先つ頃堀川の御所にて、六彌太には忠度の陣所へ向へと花に短尺、此熊谷には敦盛の首取よとて、辨慶執筆の此制札、則札の面のごとく御諚に任せ、敦盛の首討取たり、御實檢下さるべしと、蓋を取ば、ヤア其首はとかけ寄女房、引寄て息の根とめ、御臺は我子と心も空、立より給へば首を覆ひ、詞コレ申實檢に備へし後は、お目にかける此首、おさわぎ有なと熊谷が、いさめに遣はしたなう、寄も寄れず悲しさの、ちとに碎くる物思ひ、次郎直實謹で、詞敦盛卿は參議の御胤、此花江南の所無は、則北面の嫩、一子をさらば一子を切べし、花に準し制札の面、察し申て討たる此首、御賢慮に叶ひしか、但直實過りしか、御批判いかに

と言上す。義經欣然と實檢ましまし、詞ホホ花を惜む義經が心を察し、
 アよくも討たりな、敦盛に紛れなき其首、ソレ由縁の人も有べし、見せて
 名残を惜ませよと、仰を聞より、コリヤ女房、詞敦盛の御首、藤の方へお
 目にかけてよ、アイあいと計女房は、あへなき首を手に取上、見るも涙にふ
 さがりて、かはる我子の死顔に、胸はせき上身もふるはれ、持たる首のゆ
 るぐのを、うなづくやうに思はれて、門出の時にふり返り、につと笑うた
 面ざしが、有と思へば可愛さふびんさ。聲さへ咽につまらせて、詞申藤の
 方様、御歎有た敦盛様の此首、ヒヤア是は、サイナア申、これよう御らん遊
 して、お恨はらしよい首じやと、譽ておやりなされて下さりませ、申此首
 はな、私がお館で、熊谷殿と忍び逢、懐胎ながら東へ下り、産落したは、
 ナ此敦盛様、其節おまへも御懐胎、誕生有し其お子が、無官の太夫様、兩
 方ながらおなかに持、國を隔て十六年、音信不通の主従が、お役に立たも

因縁かや、せめて最期は潔う、死なされたかと怨めしげに、とへど夫は瞬
 も、せん方涙御前を恐れ、餘所にいひなす詞さへ、泣音血を吐思ひなり。
 藤の局は御聲曇り、詞ノウ相模、今の今迄我子ぞと、思ひの外な熊谷の情、
 そなたは嘸や悲しかろ、かうした事とは露しらず、敵を取らうの切らうの
 と、いうた詞が恥しい、我子の爲には命の親、忝いと手を合せ、此首の生
 世の中、逢見ぬ事の悔しやと、俱に歎かせ給ひしが、是に付いぶかしきは、
 此濱の石塔、敦盛の幽霊が建させたとの噂といひ、秘藏せし青葉の笛、石
 屋の娘が貰ひし迎我手に入、最前其笛吹た時、あの障子に移りしかけは、儘
 に我子と思ひしが、詞もかはさず消失しは、詞アいや其笛の音を聞てかけ出
 し敦盛の幽霊、人目有と引とゞめ、障子ごしの面かけは、義經が志と、聞て
 御臺は我子の無事、悟りながらも箒木の、有とは見えて隔られ、又も涙に
 くれ給ふ。折節風に誘はれて、耳を突ぬく法螺貝の、音かまびすく聞ゆれ

ば、義經はいさみ立、チャク熊谷、詞着到知せの法螺の音、出陣の用意くと、仰に直實畏り、急ぎ一間に入にけり。最前より様子を聞居る梶原平次、一間の内より踊り出で、詞斯あらんと思ひし故、石屋めを詮議に事よせ窺ふ所、義經熊谷心を合せ、敦盛を助し段々、鎌倉へ注進と、云捨かけ出す後より、はつしと打たる手裏劔は、骨を貫く鋼鐵の石鑿、うんと計に息絶る。スハ何者といふ中に、立出る石屋の親仁、詞ハハお前方の邪魔に成、こつばを捨て上ました、扱幽霊の御講釋、承はつて先安堵、もうお暇と立行を、チャア待て親仁、詞コリヤ彌平兵衛宗清待てと、義經の詞に恟り、はつと思へどそらさぬ顔、詞ハレやれくと、つけもない、御影の里に隠れのない、白毫のみだ六といふ男でます。ハハハ誠や諺にも、至て憎いと悲しいと嬉しいとの此三つは、人間一生忘れずといふ。其昔母常盤の懷に抱かれ、伏見の里にて雪に凍しを、汝が情を以て親子四人が助りし嬉しさ。其時は

我三才なれ共、面影は目先に残り、見覺有眉間のほくろ、隠してもかくされまじ。詞重盛卒去の後は、行衛知ずと聞しが、ハテ堅固で居たな満足やと、聞よりみだ六づかくと立寄、義經の顔穴の明ほど打ながめ、詞テモ恐しい眼力じやよなア、老子は生れながらにさとく、莊子は三つにして人相をしると聞しが、かく彌平兵衛宗清と見られた上は。エエ義經殿、其時こなたを見通さずば、今平家の楯籠る鐵拐が峰、鴨越を攻落す大將は有まい物。又池殿と云合せ、頼朝を助ずば、平家は今に榮ん物。エエ宗清が一生の不覺。是に付ても小松殿御臨終の折から、平家の運命未危し、詞汝武門を通れ身を隠し、一門跡吊へと、唐土育王山へ祠堂金と偽り、三千兩の黄金と、忘わすれかたか筐の姫君一人預り、御影の里へ身退き、平家の一門先立給ふ御傍の石碑、播州一國那智高野、近國他國に建置し、施主の知ぬ石塔は、皆是彌平兵衛宗清が、涙の種と御存じしらずや。今度敦盛の石塔眺に見えし

時も御幼少にて御別申せし故、御顔は見覺ね共、心得ぬ風俗は、ヒヤ世を忍ぶ平家の御公達ならんと思ふより、心能く受合しが、扱は命にかはりし小次郎がぼだいの爲、此濱の石塔は、敦盛の志にて有けるか。ヘツエいかに天命歸すれば迎、我助し頼朝義經、此兩人の軍配にて、平家の一門御公達一時に亡ぶるとは。ハア是非もなき運命やな。詞平家の爲に獅子身中の虫とは我事。嚙御一門陪臣の魂魄、我を恨ん淺ましやと、或は悔或は怒り、涙は瀧をあらそへり。元來さとき大將義經、詞ヤアく熊谷、障子の内の鎧櫃、ツレこなたへ。はつと答へて次郎直實、出陣の出立と、好む所の大あらめ、鍬形の兜を着し、抱出たる鎧櫃、御目通りに直し置。詞コリヤく親仁、其方が大切に育る娘へ、此の鎧櫃届てくれよ、コリヤ彌陀六。ヤアみだ六とは。フツ宗清なれば平家の餘類、源氏の大将が頼べき筋は。ムム面白い、みだ六め頼まれて進ぜましょ。したが娘へは不相應な下され物、

マア内は何でござります、改めて見ませうと、蓋押明れば敦盛卿、ノウなつかしやと藤の方、かけ寄給へば蓋びつしやり。詞イヤ此内には何にもない。フア何もないくく。ホホ是でちつと虫が納まつた。ノウ直實、貴殿への御禮は、コレく此制札、一枝をさらば一子を切て、ヘツエ忝いと、いふに相模は夫に向ひ、我子の死だも忠義と聞ば、もうあきらめて居ながらも、源平と別れし中、どふしてまあ敦盛様と、小次郎を取かへやうが。詞ハテ最前も咄した通、手負と偽り、無理に小脇にひつばさみ、連歸つたが敦盛卿、又平山を追かけ出たを、呼かへして首討たのが小次郎さ、知れた事と尖^{すど}なる、咄に相模はむせび入、エエどうよくな熊谷殿、こなた一人の子かいなう、逢はうくと楽しんで、百里二百里きた物を、とつくりと譯もいはず、詞首討たのが小次郎さ、しれた事ともぎどうに、しかる計が手がらでも、ござんすまいと聲を上、泣きくどくこそ道理なれ。心を汲

で御大將、いさみを付んと、ヤア熊谷、詞西國出陣時移る、用意いかに
 と仰に直實、恐ながら先達て、願ひ上し暇の一件、かくの通と兜を取ば、切
 拂うたる有髪の僧、義經も感心有ホホさも有なん。それ武士の高名譽を望
 も、子孫に傳へん家の面目、其傳ふべき子を先立、軍に立ん望は。ホウ尤。
コリヤ熊谷、願ひに任せ暇を得さするぞよ。汝堅固に出家をとげ、父義朝
 や母常盤の回向も頼むとしたしき御説。ハハ有がたしと立上り、上帶を
 引ほどき、鎧をぬげば袈裟白無垢。相模是はと取付を、詞ヤア何驚く女房、
 大將の御情にて、軍半に願ひの通り、御暇を給はりし我本懐、熊谷が向ふ
 は西方彌陀の國、悴小次郎が抜がけしたる九品蓮臺、一つ蓮の縁を結び、
 今より我名も蓮生と改めん、一念彌陀佛即滅無量罪。十六年も一むかし、
 ア夢で有たなあと、ほろりとこぼす涙の露、柎に置初雪の、日かけにとけ
 る風情なり。ヲアさうじやく。我子の罪障消滅の、加勢は是と切たる黒

髪、詞はなくて御大將、藤の局も諸共に、御涙にぞくれ給ふ。長居は無益
 と彌陀六は、鎧櫃にれんじやくを、かけた思案のしめくゝり、詞コレくゝ
 義經殿、若又敦盛生返り、平家の殘黨駆あつめ、恩を仇にて返さばいかに、
詞ヲ夫こそは義經や、兄頼朝が助かりて、仇を報ひし其ごとく、天運次
 第恨を請けん、げに其時は此熊谷、浮世を捨て不隨者と、源平兩家に由縁
 はなし、互にあらそふ修羅道の、苦患を助る回向の役、詞此彌陀六は折を
 得て、又宗清と心の還俗、我は心も墨染に、黒谷の法然を師と頼み、教へ
 を請けんいざさらば、詞君にも益々御安泰、お暇申すと夫婦づれ、石屋は
 藤のお局を、伴ひ出る陣屋の軒、御縁が有ばと女同志、命があらばと男同
 志、堅固で暮せの御上意に、有がた涙名殘の涙、又思ひ出す小次郎が、首
 を手づから御大將、此須磨寺に取納め、末世末代敦盛と、其名は朽ぬこが
 ねざね、武藏坊が制札も、花を惜めど花よりも、惜む子を捨武士を捨、す

み所さへ定めなき、有爲轉變の世の中やと、互に見合す顔と顔、詞さらば
くおさらばの、聲も涙にかきくもり、わかれてこそは出て行。

——一谷嫩軍記——

御 殿

いつまでも、變らぬ御代にあひ竹の、よはは幾千代八千代經る、千代を壽く爪音は、鎌倉山に美
を盡す、冠者太郎義綱公の奥御殿、懦弱の聞え隠れなく、砂川へ隠居ありければ、御長男鶴喜代
丸、幼稚ながらも御家督定り、近き頃より御病氣とて、お傍には男を禁じ、諸士の對面叶はねば、
家中を始め典藥まで、何としあんもせんじ様、常より館物さびし。諸士頭信夫の庄司爲村の後室
沖の井御前、渡會銀兵衛が妻の八汐、襟姿しとやかに、禮儀正しく打通り、「イヤ申し八汐様、大
殿義綱様御隠居遊ばし、御幼稚ながら御家督の鶴喜代様、此程より御不快とて、御食事も召上れ
ず、殊更人に逢ひ給ふ事がお嫌ひとて、男を禁じて近習小姓も遠ざけられ、お傍には政岡殿、こしもと 奥の
衆の外叶はず、何卒直に御容體、窺ひ申す私か心二さればいな、手前夫銀兵衛は御膳部行と云ひ、
今後見の刑部様の御出頭、夫さへ御對面叶はぬとは、コリア政岡の胸中に、深い所存が有つての
事か、モ今日は是非とも御容體、見届けねば下られずと、奥女中まで申込み置いたれば、御保養
旁追付け是へお出の筈、何かの様子とつくりと、心をお付け遊ばせ」と、二人が噂の程もなく、
奥より秘走り出で、「殿様は御出」と、知らせの中に、まだ前是なき鶴喜代君、お傍のお伽も同

い年、政岡が子の千松が、昇いて出でたる鳥籠の、エイエイサツサ愛らしき、跡に付添ふお乳の
人、はつと二人は頭を下げて、恐れ敬ひ奉る。政岡御前に手をつかへ、「信夫の庄司爲村の後室沖
の井、渡會銀兵衛の内方八汐、御病氣の御様子伺ひのため參上」と、申上ぐれば大人しく、「二人
共よう見舞うてくれた、大儀々々」と情有る、仰にはつと恐入り、「誠に存せしよりも麗しき御容
體、見奉りて我々が安堵、さりながら御食事進み給はぬ由、モ一家中の心遣ひ、恐れながら沖の井
が、申付けし今日の御膳、少しなりとも召上られ下さる様、ソレく早う」と詞の下、はつと答へて
お傍の女中、捧げる膳の目八分、御前に直せば嬉しげに、「そんならモウ、飯食うても大事な
か」と、座に付き給ふを政岡が、尻目に睨まれもぢく、「イヤイヤ、おりやモウ飯は厭ぢ
やイヤ。アレ見よ千松、雀が飯を食ひたいやら、口を開いて鳴くわいやい、弱し奴ぢや」と乳母
が顔、見やる目元に涙くむ、御心根のいたはしさ、ぢつと堪へて政岡が、「イヤ申しお二人様、あ
の通り御膳をお進め申しても、いやぢやイヤと御意遊ばず、お傍に付添ふ政岡が心遣ひ、御推量
下さりませ。が醫脈を窺ひ申さんにも、男たいせし者はお嫌、夫故に典藥も」オ、此八汐もそこ
へ心の付きし故、御典藥大場道益が妻の小卷、女ながらも夫に劣らぬ醫術の譽、御容體窺はせん
爲、召連れて參りし、ソレ召出せ」と詞の下、はつとお次へ秘が、やがて伴ふ年輩も、四十に近き
二つ鬚、襟さばきもしとやかに、遙末座に手をつかへ、「恐れながら、大場道益が妻の小卷、御脈
窺ひ奉らん」と、すり寄れば政岡が、いざと進めた鶴喜代君、御手を出させ給ひければ、恐れ憤
しみ御脈體、とつくと窺ひ驚く面色、「ヤア、コリヤ只今必死のお脈」と、いふに胸り驚く人々、
暫し詞も無かりしが、沖の井御前不審顔、「イヤコレ小卷、御物ごし御顔色、常に變らぬ御様子、
夫に必死の御脈とは」ハア成程御不審御尤、仰の通り麗しき御容體、夫に引きかへ絶命の御脈
は、モ何とも不思議、恐れながら若君様、是へ御越し遊ばされよ」と、遙こなたへ誘ひて、復
も窺ふ御脈に、はたと手を打ち、「ハテ不思議や、あれにて見れば必死の御脈、今又是にて窺へ
ば、常に變らぬ御脈體、ハテ怪しや」と眉に皺。政岡始め人々も、更に心は納らず、何思ひけむ沖

の井御前、長押に掛けたる長刀追取り、ぐつと突込む天井の、板腰放せば怪しき曲者、落つるを透さず取つて引伏せ、用意の捕繩手はしかく、高手小手にくり上げ、神「お脈の不審の其根元、サア真直に白状せよ。陳するに於ては水責火責、憂目を見するがサア何と」と、きめつけられて「ア、コレ申します、イヤモ斯う現る、上からは、有様に申します。鶴喜代君を殺してくれと、頼まれたも褒美が欲しさ」神「ム、シテ其の頼人の名は何と」政「サ何者に頼まれた」神「サア、どうぢや」政「サア何と」と、側に詰め寄る政岡が、顔を眺めて「テモ扱も、アノしらなくしい顔わいの、其頼人は誰で有らうぞ即此方」政「ヤア何と」「ア、コレ、もう隠しても隠されぬ、千松とやらを、代に立てたさ、若君を殺してくれと、ナツレ、頼ましやつたぢや無いかいの」「ヤア、コナ下郎めが大それた偽言、コリヤ自を科に取つて落さん爲、己を頼んだ拵事ぢやな」「イヤコレ政岡殿、モいか様にあらがはれても、こなたの工といふことは、此八汐が腕んで置いた、とても叶はぬ覺悟めされ」「ム、假初ならぬ一大事、とつくりと正しめせず、妾が業とおつしやるには、何ぞ慥な」オ、證據といふは其曲者、サ現在こなたを傍に置いて、あの通りに言ふからは、モ是に上越す證據はない。がまた其上にコレ此一通、鶴が岡の神木の本に、埋めて有つた釘付の箱、内に込めたる願書の文言、若君を調伏し、我子を出世させたい望、願主松枝節之助、乳母政岡と、有りく」と書いたが慥な證據、サ何と違ひは有るまいかの「イヤノ、是夫も眞赤いな似せ筆、更に此身に覺えは無い、無實を言ひ懸け、跡で後悔なさるゝな」「ム、是程慥な證據が出て、まだ潔白なあらがひ立て、シテ又覺えないと言ふ、サ證據が有るかな」サア夫は「サア、何と、詰掛けられて政岡が、覺えなき身の云譯も、證據なければ今更に、無念涙の外ぞ無き。オ、云譯は有るまい、云譯なくば通れぬ科人、節之助諸共に、牢屋へ引打込み急度糺明、今日より若君の御守役は此八汐、ヤア侍中、政岡を縛り上げ、牢屋へ引け」と呼はるにぞ、若君はおろく涙、「乳母が牢へ行くなら、おれも付いて行きたいわい、やい」エ、そりやマア何を御意遊ばす、八汐が申す事、ようお聞き遊ばせや。あの政岡はナ、君に敵

たふ大科人「イヤ科人でも大事な、乳母は何處へも遣ることならぬ」デモ伯父様刑部様の仰付「イヤ、其刑部も其方達も、皆おれが家來ぢやないか。夫程牢へ入れたくは、政岡が代りに、そち達から牢へ行け。乳母と放れて居ることは、いやぢやなく」と腕白も、自然と備はる仁心に、嬉しさ限り政岡が、身に泌み渡る有難涙、只手を合すばかりなり。道の八汐も主命に、返答なければ沖の井御前、「君の仰までもなく、お乳の人に科はない。朝夕お傍を片時放れぬ政岡殿、サ誠若君を害せんと思は、人手を頼むまでもなく、仕様も様も有るべきこと。サ夫に何ぞや此曲者、誠政岡殿に頼まれなば、一旦は隠れ通る、管、自が長刀の、光に脆く飛び下りしは、ハテ頼もし頼まれ人、又道益が妻の小巻、必死の脈と云ひたるも、モあまり翻符が合ひ過ぎて、此沖の井は呑込めぬ」ハア、イヤ夫ればかりでない、此願書、願主松枝節之助、政岡と有るからは「神「イヤ夫とて同じ事、かゝる大事を工む者が、有りく」と名を顯はし、證據の種を残し置かうや。サ若しや其名が八汐と在らば、お前は科を被る氣か。モあんまり工が淺はかで、詮議立するお人まで、底意の程が心得ぬ。曲者めを拷問して、五十四郡を呑まんとする、工の底を白状させ、悪事に組する方人ども、一々首を並べて見せう。サとつくと見物、成されよ」と、此場の善悪明白に、見通す如き辯舌は、實にも信夫の後室と、奥ゆかしくぞ見えにける。理の當然に拉かれて、八汐は尙も減らず口、「テモつべこべと能うおつしやるの、が所詮分らぬ水掛論、モ何時まで言うても同じ事、マア此儘に差措いて、追つての詮議夫までは、小巻も下つて休息召され」と目くばせし、伴ふ一人に一物の、有りと見抜きし後室の、眼鏡はづさぬ一跡見送りて政岡が、捌、「曲者引け」と嚴重に、心は隔つ竹の間の、襖押明け入りにける。跡見送りて政岡が、正無き事も身に懸る、科は霽れても晴れやらぬ、養君の行末を、誰に問ふべき様も無く、心一つの憂き思、物案じなる母親の、顔を詠むる千松に、鶴喜代君も打守り、「コレ乳母、モウ何云うても大事ないかや」「アイアイ外に誰

も居りませず、何なりとも御意遊ばせ。ほんに先に沖の井殿、若へ御膳を上げた時、豫て乳母が申した事、お聞入遊ばして、ようマアお上り遊ばさなんだナア。夫でこそ此乳母が、お育て申した若殿様、オ、お出かし成された天晴な」と、譽むればあどなき稚氣に、「ヤイ乳母、ひもじいと云ふ事は、強い武士の云はぬ事と、常に其方が云うた故、おれは云はねど先にから、空腹に成つたわやい」「オ、お道理でござります、今日は思はぬ事故に、御飯の拵へも遅う成り、あなた様にも嘸お待ちかね、千松もよう辛抱しやつた、モウ拵へて上げます」と立上れば、「ナウ乳母、こゝに在る此膳を、給べるのは悪いかや」「ア、イヤ申し、其御膳を上げる程なれば、乳母も苦勞は致しませねど、此程から怪しい事ども、忠義厚き沖の井殿、差上げられた其御膳、疑ひはなけれども、油斷の成らぬ此時節、上げてよければ此政岡が上げます。コレようお聞き遊ばせや、今お館には悪人蔓はびこ

り、御近習小姓膳番まで、ちつとも心は許されず。忠臣の節之助は、不義者として遠ざけられ、力とする者も無く、朝夕の御膳は皆庭へ捨てさせて、私
が手づから拵へて差上ぐるも、若し毒藥の工もと、微塵も心はゆるされず。
空腹なお道理ながら御前のおこらへ遊ばす爲、此千松も四五日前から、
三度の食事もたつた一度、忠義故ぢやと堪へて居ります。コレ千松、そな
たは云ふ事よう聞いて、何とも云はずに辛抱する。オ、賢い、強い強
い強者ぢや」と、譽むれば千松、「コレ鼻様、侍の子といふ者は、ひもじ
い目をするが忠義ぢや。又給べる時には毒でも何とも思はず、お主の爲に
は喰ふ物ぢやと、云はしやつた故に、わしや何とも云はずに待つて居る。
其替り忠義をして仕廻うたら、早うまゝを食はしてや。夫までは翌日まで
も何時までも、かう急度坐つて、お膝に手を著いて待つて居ります。お腹
が空いてもひもじう無い、何とも無い」と澁面作り、涙は出づれど稚氣に

譽められたさが一杯に、「こちや泣きはせぬわえ」と、額を撫でて泣顔を、隠す心は流石にも、名に負ふ武士の種なりき。母は健氣さいぢらしさ、目に持つ涙心には、御前に聞かす譽詞、「オ、さうぢや〜強者ぢや、千松はいかう強う成りやつたはいの」「イヤ千松よりおれが強い。ヤイ政岡、おれはちつとも空腹には無いぞよ。大名といふ者は、飯も何にもたべずに、かう坐つて居る者ぢや。ナウ乳母、おれは強者ぢや」「是は又氣疎い事の、さうお行儀な所を見ては、まだ〜千松などは叶はぬ叶はぬ。オ、お強い〜、さうお強うては、コリヤ早う飯を上げさ成るまい、ドレ拵へう」とかい立つて、傍へに飾る黒棚より、取出す錦の袋物、風爐に掛けたる茶飯釜の、湯の試を千松に、飯ます茶碗も樂ならで、お末が業をしがらきや、いつ水指しを炊き桶、流す涙の水こぼし、心も清き洗ひ米、釜に移して風爐の炭、直して煽ぐ扇さへ、骨も碎くる思ひなり。「アレもう飯ぢや」と御機嫌の、

我子も共に悦顔、見れば胸まで突つかくる、涙呑込み呑込んで、「モウ上げますぞえ」「鼻様早う上げましてや」「オオ上げませいで何とせう、今上げます。まちつと煮立つ其間、お氣に入りの雀の子、モウ親鳥が来る時分、其處へ直してお慰、「アイ〜〜」と千松が、返事はすれど立ち悩み、歩む姿もたよたと、置き直したる小鳥籠、ちうと教へる親鳥の、軒端の竹に飛びかはず、子は孝行に面瘦せて、はごくみ返す烏羽王の、涙を隠すうなひ髪、かゝれば直に飯に成る。「ソリヤもう飯ぢや」と悦ぶ子。「コレ千松、何とも無いと云ふ下から、忙しない何の事ぢや。何時も唄ふ雀の歌、唄うて御前の御機嫌取りや、エ、鈍な兒では有るわい」と、叱られておろ〜涙、しやくりながらの濕り聲、「こちの裏の齊墩ちかきの木に、〜、雀が三足留つて、〜、一羽の雀がいふ事にや、〜、夕べ呼んだ花嫁御、〜」竹の下葉を飛び下りて、籠へ寄來る親鳥の、餌食みをすれば子雀の、

嘴さし寄する有様に、「アレ〜乳母、雀の親が子に何やら喰はし居る、おれもあの様に、早う飯がたべたい」と、小鳥を羨む御心根、「オ、お道理ぢや」と云ひたさを、紛らす聲も震はれて、「わしが息子の千松が、〜」
 「エ、コレ千松、殿様の御機嫌を、エ、何を泣顔する事が有る、ちひさうても侍ぢや、コレ」、「七ツ八ツから金山へ、〜、一年待てどもまだ見えぬ、〜」
 「乳母まだ飯は出来ぬかや」「オ、もう出来ませう」「二年待てどもまだ見えぬ、〜」
 「鼻様飯はまだかいの」「エ、忙しい、そなた迄が同じ様に、行儀の悪い」「イエ〜わしはたべたい事は無けれど、御前様がおひもじからうと思つて」「エ、何のお強い、お殿様が、おせがみ成されよう、ソリヤ其方がせがむのぢや」「イエイエ私はせがみはしませぬ」「サアせがまずば今の歌、聲張上げて唄うて見や」と、云はれて涙の聲張上げ、「ほろり〜とお泣きやるが、〜」
 「力なくなく泣聲を、隠して連

れる母親が、「何が不足でお泣きやるぞ、〜」
 歌の唱歌も身に當る、涙はお乳が胸の内、子故の闇を遣る瀬なき。若殿小陰を打詠め、「アレアレ千松、狎が来る呼べ〜」「狎よ来いこい」呼べば駆ける縁の上、「オ、よい所へよう来たなア、ほんにわれは仕合せ者、おすべりの此御膳、殿様の御機嫌を、直した御褒美戴け」と、紙折り敷いて並ぶれば、悦ぶ體を見る若君、「乳母、おりやアノ狎に成りたい」と、羨み給ふ御風情、聞く悲しさを堪へかね、「オ、お道理ぢや〜、日本國の其中に、幾億萬と限無き、人の果報を請け給ひ、五十四郡の御主と、榮耀榮華は上も無き、何暗からぬ御身にて、思ひがけ無い御辛抱、縦へ賤しい下下でも、斯ういふ事が有る物か。ましてや遂に見も聞きも、なみだながらに政岡が、申す事とおとなしう、聞入れ給ふ痛はしや。現在御内の御家來が、邪非道に組み従ひ、殺害せんとこの工とは、知つたる故に蔭身に添ひ、おまめな御身を御

病氣と、世間を偽り胸欲に、稚い御身に朝夕さへ、思ふ様に上げぬ故、鳥獸の餌ばむをば、羨しがらるお詞は、御尤ともお道理とも、云ふに云はれぬ御身の因果、雀や犬に劣つたる、宮仕して忠義ぢやと、云はれう物か」と喰ひしばり、胸も煮立つ風爐先の、屏風にひしと身を寄せて、奥を憚る忍泣。稚けれども天然に、太守の心備はりて、「コレ乳母、何で泣くぞいやい、其方そちや千松もたべぬ内、おれ一人忙しいと思ふなら、モウ堪忍して泣いてくれな。其方達二人がたべぬ内は、何時までもおれは堪へてゐる。おれがたべても、乳母がたべずに死にやつたら悪いナア。千松、そちが死んでも悪いナア」「ハイくくく、ようおつしやつて遣されます、アア有難う御ざります。乳母が今泣いたのはな、アリヤ飯の早う出来る呪。何も悲しい事はござりませぬ。コレモウ涙は無い、ナ御覽じませ、ホ、ホ、ホ、ホ、をかしいく。サアく今の呪で、モウ飯が出来ました、いつもの様に、

握々して上げましょ」と、飯いっか七取つて手の内に、結ぶを千年と待侘びて、手を出し給へば、「マアくお待ち遊ばせや、吟味の上にも吟味せねば、御辛抱のかひが無い、先御毒味」と千松が、顔を眺めて、「ム、氣遣ない、サアサア御前、御心静かに召しませ」と、云ふにいそいそ御悦び、千萬石を手の裡に、握る御身に引替へて、只一握の握飯を、數の珍味と思召す、御心根の勿體なやと、君を思ひ我子を思ひ、心の奥の忍ぶ山、忍涙の折からに、「梶原様の奥方御入なり」と呼はる聲、「ハテ心得ぬ、梶原の奥方は、何にもせよお通し申せ。コレ千松、そなたは次へ、常々母が云ひし事は、必ず忘れまいぞ、早う」と追ひやつて、衣紋繕ふ其内に、沖の井八汐も出迎ひ、敬ふ襖押し聞かせ、梶原平三景時の奥方、夫の權威にさかえ御前、しとくと上座に直り、「オ、何れくも出迎大儀、自今日來りしは、右大將の御上使、夫景時承はれども、義綱の一子鶴喜代病氣によつて、男

たる者を禁じたと聞きし故、夫に代る此榮、義綱隱居の其後、鶴喜代の所勞、殊に食事も進まぬ由、御心を付けられし此御菓子、頼朝公より下され物、有難く頂戴有れ」と持たせし菓子箱さし出せば、八汐引取り、「コレハ〜有難い大將よりの下され物、サア〜申し若殿様、早う頂戴遊ばしませ」と、蓋押開き、「テモまあ見事な結構な此お菓子、イヤ召しませ」と差出す。流石童の嬉しげに、立寄り給ふ鶴喜代君、「ア、申し御前様、又其様なさもしい事、御病氣の御身なれば、お毒に成つたら何と成さる、此方へお越し」と政岡が、詞打消す榮御前、「ヤア頼朝公より下さる、御菓子、何疑うて頂戴させぬ、是非此榮が食べさせる」「ア、イヤ夫でも」「ム、但し頼朝公の仰は、背いても苦しうないか」「サア」「サア〜〜」と權柄押、奥より走つて千松が、「其菓子欲しい」と引摺み、何の頑是も只一口、八汐が恟り榮御前、毒の工の顯れ口、忽惱亂目を見詰め、蹴ちらか

したる折は散亂、八汐は透かさず千松が、首筋片手に引寄せて、懷劍ぐつと突込めば、わつと一聲七轉八倒、驚く沖の井政岡が、仰天ながら一大事と、若君押し遣る我部屋口、戸口に付添ひ守り居る。「ヤア何をざわ〜、騒ぐ事は無いわいの。忝くも頼朝公より下されし此折、蹴破りしは上への無禮、小い餓鬼でも其儘には差置かれぬ、夫故に手に懸けたは、お家の爲を思ふ八汐が忠節。ム、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、オ、可愛さうに〜、痛いかいなう、〜、他人の私さへ涙がこぼれる。コレ政岡殿、現在の其方の子、悲しうも無いかいの」何のマア、お上へ對して慮外せし千松、御成敗は御家の爲「ム、スリヤ是でも此方は何とも無いか、ヤ是でもか、是でもか」と、戮殺しに千松が、苦む聲の肝先へ、こたゆる辛さ無念さを、ちつと堪ゆる辛抱も、只若君の大事ぞと、涙一滴目に持たぬ、男勝の政岡が、忠義はせんだい末代まで、復有るまじき烈女の鑑、今に其名は芳

しき。榮は始終政岡が、素振に氣を付け打ほし、笑み、「オ、出かした八汐、右大將より鶴喜代へ下さるゝ大切の御菓子、小^{せがれ}紛^めが出しやばつて、すつての事に大事の工、イヤアノ大事の菓子を荒した科、殺したは八汐が働、さすが渡會銀兵衛が妻程有る。政岡には自が、云聞かす事も有り、沖の井八汐兩人は、暫く次へ間を隔て、遠慮召され」と榮の詞、何と違變も沖の井が、深き心は和田津海の、汐の八汐も打連れて、伴ひ一間へ入りける。跡先見廻し榮御前、政岡が傍にすり寄つて、「年頃仕込みしそなたの願望、成就して嘸悦び」「エ、何とおつしやる」「ア、イヤ、モ隠すには及ばぬ、東西分かぬ内よりも、取替へ置きしそなたの子の鶴喜代が身に恙なう、義綱の誠の紛千松が此最後、嘸本望で有らうなう」「エ、」「オ、取替子の様子は先達て知つたれども、若しやと思ひ最前から、窺うて見る所、血筋の子の苦しみを、何ぼ氣強い親親でも、堪へらるゝ物ぢやない。若殿

にして置く我がが大事、そなたの顔色變らぬは、取替子に相違は無い。スリヤ皆々心は同腹中、刑部殿とも内談しめ、諸事我夫の指圖有らん。先今日は立歸り、病氣の様子申上げん、必ず必ず何事も、人に覺られまいぞや」と、一人呑込み悠々と、館をさして歸らるゝ。跡には一人政岡が、奥口窮ひくゝて、我子の死骸抱き上げ、こたへくし悲しさを、一度にわつと溜涙、せき入りせき上げ歎きしが、「コレ千松、よう死んでくれた、出かしたなく。そなたが命捨てたゆゑ、邪智深い榮御前、取替子と思ひ違へ、己が工を打明けしは、親子の者が忠心を、神や佛も憫みて、鶴喜代君の御武運を、守らせ給ふか、ハハ、有難や、有難や。是と言ふのも此母が、常々教へて置いた事、稚心に聞分けて、手詰に成つた毒害を、よう試みてたもつたなう、オ、出かしやつた、く。そなたの命は出羽奥州、五十四郡の一家中、所存の臍を堅めさす、誠に國の礎ぞや、とは云ふものの可愛

やな、君の御爲豫てより、覺悟は極めて居ながらも、せめて人らしい者の手に懸つても死ぬ事か、素姓踐しい銀兵衛が、女房連の劔に掛り、なぶり殺しを現在に、傍に見て居る母が氣は、どの様に有らうどう有らう、思ひ廻せば此程から、唄うた歌に千松が、七つ八つから金山へ、一年待てどもまだ見えぬ、二年待てどもまだ見えぬと、歌の中なる千松は、待つかひ有つて父母に、顔をば見せる事もある、同じ名の付く千松の、そなたは百年待つたとして、千年萬年待つたとして、何の便があるぞいの、三千世界に子を持つた、親の心は皆一つ、子の可愛さに毒な物、喰ふなと云うて叱るのに、毒と見えたら試みて、死んでくれいと云ふ様な、胴欲非道な母親が、復と一人ある物か、武士の種に生れたは、果報か因果かいぢらしや、死ぬるを忠義といふ事は、何時の世からの習はしぞ」と、凝固まりし鐵石心、流石女の愚に返り、人目無ければ伏し轉び、死骸にひつしと抱付き、前後不

覺に歎きしは、理過ぎて道理なり。後にすつくと八汐が大聲、「何もかも様子は聞いた、こつちの工の妨女、己も生けては置かれぬ」と、詞の間一問押明けて、「ヤア不忠不義の銀兵衛夫婦、工の次第白狀せよ」と、立出づる沖の井、「ヤア此八汐に白狀とは」「オ、其證人は爰に在る」と、云ひつゝ出づる顔見て恟り、「ヤアそちや小卷」「オ、好い證人であらうがの、夫道益に云付けて、無理に毒藥調合せ、此事外へ洩らさうかと、よう夫を殺したな。夫の敵と思へども、女の身の討つ事叶はず、態と惡事に一味して、まづ斯う手めを下げよう爲、鶴喜代君と千松を、入替子と云うたのも小卷、夫故に榮御前、うま／＼此場を歸りしも、裏の裏行くじ加減、サア眞直に白狀」と、忠と不忠の喰合せ、毒藥却つて藥と成る、顔に似合ぬ配劑は、類ないぎの手柄なり。モウ是までと八汐が懷劔、心得政岡請流す、互に嗜む太刀さばき、手を盡したる二人の女、我子の恨一心に、突込む懷

劔打落し、直に切込む八汐が肩先、ひるむを捉つて突通され、虚空を掴んで悶き死、悪の報いは忽に、心地よくこそ見えにけり。「手柄々々」と沖の井小巻、共に悦ぶ折からに、物音人聲騒がしく、「アノ人音は縁の下、油断ならざる若君の、御身の上も氣遣なり、ヤアこしちとぢう 中、燭々あかしく」はつと答も銘々手燭、手んでに一腰長刀も、閃めき渡る縁の下、身は鐵石の節之助、寄りくる忍びを人礫、はらりくくと投げ散らす。物の文色も暗紛、丈拔群の大鼠、口にくはへし系圖の一卷、飛鳥の如く駈行くを、透さぬ松枝小柄の手裏劔、鼠の頭忽に、ぱつと燃えたつ焰と共、すつくと立つたる異形の姿、「ア、ラ不思議や、密に宿直の縁の下、斯く取り圍みて曲者ばら、騒ぎに紛れ現れしは、群に勝れし大鼠、正しく忍びの幻術なるか、ハ、ハ、怪しやナア」「此一巻を奪はん爲、大願成就嬉しやナア」と、聲は遙に節之助、「曲者待て」と聲より早く、はつしと打つたる以前の小柄、心得松枝忍

びを楯、胸先血煙り曲者は、跡を暗まし出でて行く。

——伽羅千代萩——

一字千金

一字千金、二千金、三千世界の寶ぞと、教へる人に習ふ子の、中に交はる菅秀才。武部源藏夫婦の者、いたはり傳き我子ぞと、人目に見せて片山家、芹生の里へ所替、子供集めて讀み書きの、器用不器用清書を、顔に書く子と手に書くと、人形書く子は天窓搔く、教ゆる人は取分けて、世話をかくとぞ見えにける。

中に年かさ五作が息子、一コレ皆是見や、お師匠様の留守の間に、手習するは大さな損、ありや坊主天窓の清書した」と見せるは十五の涎くり、若君はおとなしく「一日に一字學べば三百六十字との教、そんな事書かずと

も、本の清書したがい」と八つに成る子に呵られて「ませよ〜」と指さして嘲戯かゝるを、残りの子供「兄弟子に口過す、涎くりめをいがめてやろ」と、手ん手に壓尺振廻す、自然天然肩持つも、傳ふる筆の威徳かや。

主の女房奥より立出で「又こりや例の鬨諍か、おとましやく〜。今日に限つて連合の源藏殿、振舞にいてなれば、戻りもしれぬ、ほんに〜こなた衆で、一時の間も待ち兼ねる、今日は取分け寺入も有る筈、晝からは休ます程に、皆精出して習うたく〜」。ソレヤ又嬉しや休ぢや」と、筆より先に讀む聲高く、いろはに、此中は御入被下、一筆啓上候べく男が、肩に塙重文庫机を擔はせて、惻發らしき女房の、七つ計な子を連れて「頼みませう」と言ひ入る。内にもそれと早悟り「此方へおはいり遊ばせ」と言ふもしとやか。アイアイと、愛に愛持つ女子同士、來た女房は猶笑顔。「私事は此村はづれに輕う暮してをる者でござりまする、此梔白者をお世話なされて下さりよか、とお尋ね申しにおこしましたれば、おこせ、世話してやろと結構なお詞にあまへ、早速連れて參りました。内方にも御子息様がござりますげなが、どのお子でござりますぞ。」アイ是か源藏殿の跡とりでござります。」コレハ〜よい御子様や、外にも大勢の子達、いかいお世話でござりますしよ。」アイ御推量なされて下さ

りませ、シテ寺入は此子でござりますか、名は何と申します。」アイ小太郎と申しまして梔白者でござります。」イヤイヤ氣高いよいお子や、折悪う今日は連合源藏も、振舞に參られました。」是はマアお留守かいな。」お待遠なら私が呼びに參りましたよ。」イエ〜幸ひ私も參つて來る所が有れば、其内にはお歸りでござりませう。」

「コレ三助、其の持つて來た物あなたの傍へ上げませ。」アット答へて塙重、へぎに乗せたる一包、内儀の傍へ差出す。「是はマア〜いはれぬ事を。」イヤおはもじながら、此子が參つたしるし、此塙重は子達への土産、取弘めて下さりませ」といはねどしれし蒸物煮染、我が子に世話を焼き豆腐、粒椎茸の入りたるは、奔走子とこそ見えにけれ。「是はマア何から何迄取揃へて御念の入つた事、戻られたら見ませう。」イヤモほんの心計り、宜しうお頼み申し上げます。」コレ小太郎、ちよつと隣村迄往て來る程に、おとなしうして待つて居や、悪あがきせまい。いざ御内證様、往て參じましょ」と表へ出づれば「母様わしも行きたい」と繩り付くを振放し「嗜めよ、大きな形して跡追ふのか。御覽うじませ、まだ頭是かござりませぬ。」ソリヤ道理いな、ドリヤ叔母がよい物やりましたよ。つい戻つてやらんせ」と目でしらすれば「アイ〜ついちよつと一走り」と、跡追ふ子にも引かざる、振りかへり見返りて、下部引連れ急ぎ行く。

どりやこちの子と近付きにと、若君の傍へ寄せ、機嫌紛らす折からに、立歸る主の源藏常

にかはりて色蒼白め、内入りわるく子供を見廻し、「エ、氏より育ちといふに、繁華の地と違ひ、いづれを見ても山家育、世話甲斐もなき役に立たず」と思ひ有りげに見えければ、心ならず女房立寄り、「いつにない顔色も悪し、振舞ひの酒機嫌かはしらぬが、山家育は知れて有る子供、憎口は聞えも悪い、殊に今日は約束の子が寺入して居まする、悪い人と思ふも氣の毒、機嫌直して逢うてやつて下され」と小太郎連れて引き合せど、差俯伏して思案の體。幼氣に手をつかへ「お師匠様今から頼み上げます」といふに思はず振り仰向き、急度見るより暫くは打目守り居たりしが、忽面色柔らぎ「扱々器量勝れて氣高い生れ付、公家高家の御子息といつても、おそらく恥しからず、今扱そなたはよい子ぢやなう」と機嫌直れば、女房も「何とよい子、よい弟子でござんしよが」「好いとも好いとも上々吉、シテ其の連れて來たお袋は何處に」「サお前の留守なら、其間に隣村迄往て來というて」「オ、夫もよし、大極上、先子供と奥へやり、機嫌よう遊ばし召され」。

「夫れ皆お隙が出た、小太郎共に奥へ」と、若君諸共誘はせ、跡先見廻し、夫に向ひ「最前の顔色は常ならぬ血相、合點の行かぬと思つた所に今又彼の子を見て、打つてかへての機嫌顔、猶以つて合點行かず、どうやら様子が有りさうな、氣つかひな、聞かして」と問へば、源藏「ホ、ウ氣つかひな筈、今日村の饗應と偽り、某を庄屋の方へ呼付け、時平が家來春藤玄番、今一人は菅丞相の御恩を被ながら、時平に隨ふ松王丸、此奴病みほうけながら、見分

の役と見え數百人にて追取卷き、汝が方に菅丞相の一子菅秀才、我子としてかくまふよし、訴人有つて明白、急ぎ首討つて出すや否や、但し踏ん込み請取らうや、返答如何にと、退つ引きならぬ手詰、是非に及ばず首討つて渡さうと請合た心は、數多有る寺子の内、何れなりとも身がはりと思つて歸る道すがら、あれか是かと指折つても、玉簾の中の誕生と、菰垂の中で育つたとは、似ても似付かず、所詮御運の末なるか、いたはしや淺ましや、と屠所の歩みで歸りしが天道のひかへ強きにや、あの寺入の子を見れば、まんざら烏を鷺共云はれぬ標致、一旦身がはりで欺き、此場さへ遁れたらば、直ぐに河内へお供する思案、今暫が大事の場所」と語れば

女房「待たんせや、其松王丸といふ奴は、三つ子の内の悪者、若君の顔はよう見知つて居るぞえ」「サアそこが一かばちか、生顔と死顔は相格のかはる物、面ざし似たる小太郎が首よもや賈とは思ふまじ、よし又夫と顯れたらば、松王めを眞二つ、残る奴原切つて捨て、叶はぬ時は若君諸共、死出三途の御共と、胸を据ゑたが一つの難儀、今にも小太郎が母親迎ひに來たらば何とせん、此儀に當惑、指當つては此難儀。」「イヤ其事は氣つかひあるな、女子同士の口先で、ちよつぽくさ欺して見よ。」「イヤ其手では行くまい、大事は小事より顯はるゝ、事に寄つたら母諸共。」「エ、イ」「こりややい、若君には替へられぬ、お主の爲を辨へよ」といふに、胸すゑ、「左様でござんす氣弱うては仕損せん、鬼になつて」と夫婦は突立ち、

互に顔を見合せて、「弟子兒といへば我子も同然」「サ今日に限つて寺入したは、あの子が業か母御の因果か、報は此方が火の車、追付廻つて來ませう」と、妻が歎けば、夫も目をすり、「すまじき物は宮つかへ」と共に涙にくれ居たり。

かゝる所へ春藤玄蕃、首見る役は松王丸、病苦を助くる駕乗物、門口に昇き据ゑれば、跡には大勢村の者附隨うて「申し上げます、皆是にをる者の子供が手習に參つてをります、若取違へ、首討れては取返しがなりませぬ、何卒お戻し下され」と願へば、玄蕃「ヤアかましい蠅虫奴們、うぬらが悴の事迄、身共が知つた事か、勝手次第に運失せう」と呵り付ければ、松王丸「ヤレお待ちなされ、暫く」と駕より出づるも刀を杖。「憚りながら、彼等迎も油断はならぬ、病中ながら拙者めが見分の役勤めるも、外に菅秀才の顔見しりし者なき故、今日の役目仕課すれば、病身の願ひ御暇下るべしと、有難き御意の趣、疎には致されず、菅丞相の所縁の者、此村に

置くからは、百姓どももぐるになつて、銘々が悴に仕立て、助けて歸る術もある事。コリヤやい、百姓めら、さわたくしとぬかさず共、一人づゝ呼出せ面改めて戻してくりよ」と退引させぬ釘鏝、打てばひびけの内には夫婦、豫て覺悟も今更に、胸轟かす計なり。

表は夫れ共白髪親仁、門口より聲高に「長松ノ」と呼出せば、ヨツと答へて出でくるは、椀白顔に墨べつたり、似ても似付かぬ雪と墨、是ではないと赦しやる。「岩松は居ぬか」と呼ぶ聲に「祖父様何ぢや」とはしごくで、出でくる子供の頑是なき、顔は丸顔木みしり茄子、「詮義に及ばぬ連れうせう」と睨み付けられ、ヲ怖や、嫁にもくはさぬ此孫を、命の花落遁れしと、祖父が抱へて走り行く。次は十五の涎くり「ぼんよん」と親父が手招き、「父よ、おれは最う爰から抱れて往の」とあまへる顔は馬顔で、聲萎、「オ泣くな、抱いてやらう」と干鯉を猫なで親がくはへ行く。

「私が悴は嫖致よし、お見違へ下さるな」と断りいうて呼び出すは、色白じろと瓜實顔、こいつ胡亂うらんと引つ捕へ、見れば首筋眞黒々、墨か黥おぼかは知らねども、こいつでないかと突放す。其外山家奥在所の子供、残らず呼出して、見せてもく似ぬこそ道理、土が産した量はかり芋いも、子ばかりよつて立歸る。

スハ身の上と、源藏も、妻の戸浪も胸を据ゑ、待つ間程なく入來る兩人。「ヤア源藏、此玄蕃が目の前で、討つて渡そと請合うた菅秀才の首、サア請取らう、早く渡せ」と手詰の催促ちつとも臆せず「假初ならぬ右大臣の若君、搔首捻首にも致されず、暫は御用捨」と立上るを、松王丸「ヤア其手はくはぬ、暫の用捨と隙とらせ、逃支度しても、裏口へは數百人を付置き、蟻の這出る所もない、生顔と死顔は相格かかはるなど、身替の贖首、夫もたべぬ。古手な事して後悔すな」と言はれて、ぐつとせき上げ「ヤアいらざる馬鹿念、病みほうけた汝の目玉がでんぐり返り、逆様眼で見ようはしらず、紛れもなき菅秀才の首、追付見せう」「ア、其舌の根の乾かぬ内に、早く討て、とく切れ」と玄蕃が權柄。ハット計に源藏は、胸を据ゑてぞ入りにける。

傍に聞き居る女房は、爰ぞ大事と心も空、檢使は四方八方に眼を配る。中にも松玉、机文庫の數を見廻し、「ヤア合點の行かぬ、先達往んだ餓鬼等は以上六人、机の數が一脚多い、其悴は何所にをるぞ」と見咎められて、戸浪ははつと、「イヤこりや今日初めて寺、イヤ寺参りした子がござんす。」「何馬鹿な」「オ、それく是か則菅秀才のお机文庫」と、木地を隠した塗机、ざつとさばいて云ひ抜ける。「何にもせよ、隙とらすが油斷の元」と玄蕃諸共突つ立ち上る。こなたは手詰命の瀬戸際、奥にはぼつたり首討つ音。はつと女房胸を抱き、踏ん込む足もけしとむ。

武部源藏白臺に首桶乗せて、しづく出で、目通に指置き「是非に及ばず、菅秀才の御首討ち奉る、いはゞ大切な御首、性根をすゑてサア松王丸しつかりと檢分せよ」と忍びの鐙元くつろげて、虚といはゞ切付けん、實といはゞ助けんと、堅唾を呑んで控へ居る。「ハ、何の是しきに、性根所か、今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か金札か、地獄極樂の境、家來衆、源藏夫婦を取巻きめされ」畏まつたと捕手の人數、十手振つて立ちかゝる。女房戸浪も身を固め、夫は元より一所懸命。サア實檢せよ、檢分といふ一言も命がけ、後は捕手、向は曲者、玄蕃は始終眼を配り、爰ぞ絶體絶命と思ふ内、早首桶引寄せ蓋引き開けた。首は小太郎、贖というたら一討と、早抜きかける。戸浪は祈願、天道様、佛神様、憐み給へと、女の念力。眼力光らす松王が、ためつすがめつ伺ひ見て「ムウこれや菅秀才の首討つたは、まがひなし

相違なし」といふに悔り、源藏夫婦、傍きよろしく見合せり。

檢使の支番は、見分の詞證據に「出かした出かした、よく討つた、褒美にはかくまうた科赦してくれる。イヤ松王丸、片時も早く時平公へお目にかけん。」「いか様隙取つてはお咎めもいかゞ、拙者は是よりお暇給はり、病氣保養致したし」「ヲ、役目は済んだ、勝手にせよ」と首受取り、支番は館へ、松王は駕にゆられて立歸る。

夫婦は門の戸びつしやり締め、物も得云はず青息吐息、五色の息を、一時にほつと吹出す計りなり。胸撫でおろし、源藏は、天を拜し地を拜し「ア、有りがたや忝なや、凡人ならぬ我君の御聖徳が顯れて、松王めが眼が眩み、若君と見定めて歸つたは、天成不思議のなす所御壽命は萬々年、悦べ女房」「イヤもうく大抵の事ぢやござんせぬ、あの松王めが眼の玉へ、菅丞相様がはいつてござつたか、但し首が黄金佛ではなかつたか、似たというても瓦と金、寶の花の御運開き、と餘り嬉しうて涙がこぼれる、ハア、有がたや尊や」と悦びいさむ折からに、小太郎が母いきせきと、迎へて見えて門の戸たゞき、「寺入の子の母でござんす今漸う歸りました」といふ聲聞くより、又悔り、「一つ通れて又一つ、こりやマア何とどうせう」と、妻は騒げど夫は胸すゑ「コリヤ最前言うたは爰の事、若君には替へられぬ、狼狽者め」と戸浪を引退け、門の戸ぐわらりと引開ければ、女は會釋し、「コレハマあくお師匠様でござりまするか、悪さをお頼み申します、何處に居やるぞ、お邪魔であるに」といふを幸ひ

「イヤ奥に子供と遊んで居ます、連立つて歸られよ」と眞顔でいへば「ヲ、そんなら連れて歸りましょ」とずつと通るを後より只一討と切付くる。女は白物ひつばづし、逃げても逃さぬ源藏が双するどに切付くるを、我子の文庫ではつしと受とめ「コレ待つた、待たんせこりやどうぢや」と反ねる双も用捨なく、又切り付くる、文庫は眞二つ、中よりばらりと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の幡、顯れ出でしはコハいかにと、不思議の思ひに劍も鈍り、進み兼ねてぞ見えにける。

小太郎が母涙ながら、「若君菅秀才のお身がはり、お役に立て、下さつたか、まだか、様子が聞きたい」といふに悔り、「シテ、其は得心か」「得心なりやこそ此經帷子、六字の幡」「ムウして其元は何人の御内證」と尋ぬる内に、門口より「梅は飛び櫻は枯る、世の中に何とて松のつれなかるらん」女房悦べ、悴はお役に立つたぞ」と聞くよりわつとせき上げて、前後不覺に取亂す。「ヤア未練者め」と呵りつけ、ずつと通るは松王丸。見るに夫婦は二度悔り、夢か現か夫婦かと、呆れて詞もなかりしが、武部源藏威儀を正し、「一禮は先づあとの事、是迄敵と思ひし松王、打つてかはつた所存は如何に、不審さよ」と尋ぬれば「ヲ、御不審尤、存じの通我々兄弟三人は、銘々に別れて御奉公、情なや此松王は、時平公に随ひ親兄弟とも肉縁切り、御恩受けた丞相様へ敵對、主命とはいひながら、皆是此身の因果、何とぞ主従の縁切らんと、作病構へ、暇の願ひ、菅秀才の首見たらば、暇やらんと今日の役目、

よもや貴殿が討ちはせまい、なれども身がはりに立つべき一子なくば如何せん、爰ぞ御恩報する時と、女房千代と云ひ合せ、二人の中の悴をば先へ廻して此身がはり、机の敷を改めしも我子は来たかと心のめど、菅丞相には我性根を見込み給ひ、何とて松のつれなからうぞ、との御歌を、松はつれないくと、世上の口にかゝる悔しさ、推量有れ源藏殿、悴がなくなれば何時迄も人でなしといはれんに、持つべきものは子なるぞや」と言ふに女房猶せき上げ「草葉の蔭で小太郎が、聞いて嬉しう思ひましょ、持つべき物は子なるとは、彼の子が爲に好い手向、思へば最前別れた時、いつにない跡追うたを呵つた時の其悲しさ、冥途の旅へ寺入と、早虫が知らせたか、隣村へ行くというて道迄いで見たれども、子を殺さしにおこして置いて、どうマア家へいなる、物ぞ、死顔なりとも今一度見たさに、未練と笑うて下さんすな、包みし祝儀はあの子が香奠、四十九日の蒸物迄、持つて寺入さすと云ふ、悲しい事が世に有らうか、育ちも生れも賤しくば、殺す心も有るまいに、死ぬる子は媚よしと、美しう生れたが可愛や其身の不仕合せ、何の因果に瘡瘡迄仕まうた事ぢや」とせき上げて、かつばと伏して泣きければ、共に悲しむ戸浪は立寄り「最前にナ、連合の身がはりと思ひ付いた傍へ往て、お師匠様今から頼み上げますというた時の事思ひ出せば、他人のわしさへ骨身がくだける、親御の身ではお道理」と涙添ふれば

「イヤは御内證、コリヤ女房もなんでほえる、覺悟した御身がはり、内で存分ほえたでな

いか、御夫婦の手前も有る。イヤ何源藏殿、申し付けてはおこしたれども、定めて最期の節未練な死を致したで御座らう」「イヤ若君菅秀才の御身がはりと云ひ聞したれば、潔よう首指のべ」「アノ逃隠れも致さずにナ」「につこりと笑うて」「ム、出かしをりました、利口な奴、立派な奴、健氣な入つや九つで、親にかはつて恩送り、お役に立つは孝行者手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先立ちし、嘸や草葉の蔭よりも、羨しかるけなりから、悴の事を思ふに付け思ひ出さるゝ」と流石同腹同性を、忘れ兼ねたる悲歎の涙。「のう其但父御に小太郎が逢ひますわいの」と取付いて、わつと計りに泣き沈む。

歎きも漏れて菅秀才、一間の内より立出で給ひ、我にかはると知るならば、此悲しみはさすまいに可愛の者やと、御袖をしぼり給へば、夫婦ははつと共に浸する有がた涙。「次手ながら若君様へ御土産」と、松王ツツ立ち、申し付けた用意の乗物、早くくと呼ばはるにぞ、ハツと答へて家來共、御目通りに昇き据ゑる。早御出でと戸を開けば、菅丞相の御臺所、「ノウ母様か、「我子か」と、御親子不思議の御對面。源藏夫婦横手を打ち、「方々

と御行衛尋ねしに、何處にか御座なされし」「さればされば、北嵯峨の御隠れ家、時平の家來が聞き出し、召捕りに向ふと聞き、某山伏の姿となり、危い所奪取つたり、急ぎ河内の國へ御供なされ、姫君にも御對面。こりや／＼女房、小太郎が死骸、あの乗物へ移し入れ、野邊の送り營まん」。アイと返事の其中に、戸浪が心得抱いて來る、死骸をあじろの乗物へ、乗せて夫婦が上着を取れば、哀れや内より覺悟の用意、下に白無垢麻上下、心を察して源藏夫婦「野邊の送りに親の身で、子を送る法はなし、我々夫婦がかはらん」と立寄れば、松王丸「イヤ／＼是は我子に有らず、菅秀才の亡骸を御供申す、いづれもは門火／＼」と、門火を頼み頼まる。

御臺若君諸共に、しやくり上げたる御涙、冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛釋迦牟尼佛、六道能化のうけの弟子になり、賽の川原で砂手本、いろは書く子はあへなくも、ちりぬる命是非もなや、あすの夜たれか添乳せん、らむ

憂目見る親心、劔と死出の山けこえ、あさき夢見し心地して、跡は門火に
ゑひもせず、京は故郷と立別れ、鳥邊野さして連歸る。

——竹田出雲 菅原傳授手習鑑——

近世和歌

木下長嘯子

けふはまづ里のあげまさしるべして若菜つませよ野飼がてらに

難波潟あけぬみなとを月夜よし夜よしと出づる春の舟人

賀茂真淵

を筑波も遠つあしほもかすむなりねこし山こし春や來ぬらむ

にほどりの葛飾早稻の新しぼりくみつつをれば月傾きぬ

信濃なる須賀の荒野を飛ぶ鷺のつばさもたわに吹くあらしかな

飛彈たくみほめてつくれる真木柱立てし心は動かざらまし

田安宗武

みだれ咲くちぐさの花の色まして歸るさ惜しき野路の夕ばえ
真帆ひきてよせくる舟に月照れり樂しくぞあらむその舟人は
學ばでもあるべくあらば生れながら聖にてませどそれ猶し學ぶ

楫取魚彦

玉川に玉ちるばかり立つ波を妹がたづくりさらすとぞ見る

足曳の山の櫻ははしきかも風吹かぬ間ととく咲けるらむ

芝の野に葛ひくをとめ家のらへこの野づかさ葛ひくをとめ

本居宣長

朝さらず來鳴けかきつの梅が枝に聞きのよろしき鶯のこゑ

風かよふさ枝にすがる影見えて螢もなびく庭の吳竹

折しもあれ月もいまはのあけがたにもみぢ葉さそふ峰の木枯

加藤千蔭

あまの子が磯菜つむなる真袖より八十島かけて霞こめけり

隅田川みのきてくだす筏士にかすむあしたの雨をこそ知れ

大空は嶺のあらしにさえさえて軒の垂氷に月ぞうつろふ

上田秋成

寒き夜をあかしかねてぞ今朝見れば生駒が嶽に雪のつもれる

柳もえ蘆つのぐみて津の國の長柄の堤人のゆきかふ

湊入りのいつての舟は早きかも漕ぎそけてゆく沖の夕立

香川景樹

朝な朝なおなじところに聞ゆれどあらたまりゆく鶯のこゑ

大井川かへらぬ水にかけ見えてことしも咲ける山櫻かな

いづくより駒うち入れむ佐保川のさゞれにうつる白菊の花
めせやめせ夕けのつま木早くめせ歸るさ遠し大原の里
高圓のをのへの宮の萩が花にほふらむとも忍ばむや誰

良

寛

鉢の子にすみれたんぼほこきませて三世の佛にたてまつりてむ
水や汲まん薪やこらん菜やつまん秋のしぐれのふらぬその間に
山かげの岩間をつたふ苔水のかすかにわれは住みわたるかも

熊谷直好

志賀の浦のみぎはこのほりうちとけて霞も波もけさよりぞ立つ
さみだれに茅はら蘆はら水こえてわたし場遠し神崎の里
秋の野の尾花がうれを吹き亂り風の目に見ゆる時は來にけり

木下幸文

行きて見むこれや花ある寺ならむ松原ごしに鐘聞ゆなり
夕立は今ふりくらし卷向の檜原が上に雲きほふなり
ぬば玉の夜はふけぬとも歸らめや月さへ出でて涼しきものを
さかしらに貧しきよしといひしかど今日としなればこらすべなし
ますらをのをのこさびすと打ちあげて泣かぬ心ぞまことかなしき

毒酒を請太刀の身

驛州にありし事語り傳へて、其時の大守森脇主税之助病死あつて、若殿
市丸殿遺跡を繼ぎ給ひ、代々の家絶えず、國の成敗を執行ひたまへり。あ
る時家老祝山はりやま中務に仰出さるるは、御慰み旁々、家中の若き者共それなく
に武藝嗜める品、時ならず御覽有るべし、其内先づ人に勝れたる藝書付を
上ぐべきよし、畏つて相心得、いづれも其頭々に觸れて差上ぐるに、何の

何某は疋田流の兵法、馬は大窪が印可、居合は片山伯耆流、弓は當流、鑓は大島流、誰は鐵砲、彼は何々と、いづれか一藝なきはなかりき。

其日廣間の當番には、外山白右衛門、坂野用助、乙見瀧之進、一所にならびゐて、白右衛門云ひけるは、何と今の書付の披露の内、熊井五助が武藝の品々多きこそ合點ゆかず、其子細は、あの青男つねくの有様から生ぬるく、殊更つひに弓を手に取りたるを見たる者なし、鑓などは念もない事、及ぶまじきを、人並に書付をさし上ぐる事、是程の嘘はつかれうものに非ずと大笑ひしけるを、次の間に五助従弟白橋元左衛門これを聞いてたまりかね、其番より歸り様に五助がもとに立ちより、けふ誰々打ちよりて、此沙汰ありしと知らせければ、よくぞ聞かせ給はれ、これには分別する事ありと、その翌日家老中務まで申込みけるは、この度書上げたる武藝の品々御前にて仕りたさねがひ、中務取次ぎて伺ひければ、幸ひ御機嫌よろしく、

今日御覽あるべきよし仰出され、五助忝しと支度して、櫻の庭の廣縁に立ち出づれば、殿にも御出座有て皆々相詰め、まづ弓をはじめて三寸の的を懸けしに、三手の矢五本中り、殊更手前見事なるに列座驚き入り、次に竹刀、その入身には小石與四郎とて、家中若手の中の達者なるが出たるに、三本ながら突き止め、其次に兵法、笠田卜立が一の弟子數枝友平立合ひけるに、竹刀たゝきおとし、かさねての時には打合せるまでもなく勝負を見せければ、これまでにて措くべしと仰付られ、若殿の御感甚しく、其外の諸役人に至るまで舌をまきて、人は侮られぬものかなと、今までをかしがりし者ども興を覺ましけり。

しばらく有て五助御前に呼び出だされ、御褒美として加増百石下され、當座の面目外聞かたゞ有りがたく退出すれば、家中に其聞え隠れ無く、それより三日過ぎて、右の三人の方へ状を付けけるは、拙者事先日御評判

の武藝の義、今月二十五日櫻の庭において上覽に入れたる通り偽りなきは、定めて各も御見物有べし、然る上は御取沙汰一分堪忍ならず、伺候致すべきやこなたへ申入るべきかと、讀みも切らず驚きて、そのまゝ用助、瀧之進を呼びよせ、何と返事をせんといへば、兩人おなじく色を違へ、これは先づ誰がいひはじめて、このやうなる凄じき事を仕出して氣遣ひする事ぞ、惣じて人の噂をせぬがよい、今からも有るべき事、いづれもたしなむべしといへば、今それをいうて埒のあく事か、とかく此返事の仕やうはと頭を割らして、用助やうやう今分別出たりといふに、何と問へば、まづいかやうに思案しても死ぬる事は好かぬによつて、爰は陳じてやるにはしかず、其返事に、仰下さるゝの取沙汰、此方三人の者は貴公様の事微塵影にても日向にても悪しく申したる事なし、萬一脇に憎しむ者あつて我々に迷惑させん爲めに申したるにぞあるべし、それは御不祥ながら堪忍あそば

して給はれと、小野流のふるひ筆をとめて遣はせば、五助つくづく段々の斷りを見て、此上に何ともいひやるべきやうなし、先づ思案すべしと、其は暮れけり。

瀧之進、用助は白右衛門方に取籠り、何と五助は堪忍してくれうか、心もとなきは、あれ程の藝をかくして居る程の者ぢやによつて、そこが濟まぬ事なりと、一所に額を合せ、手に汁をにぎり、嘸もつあればすはやそれかと肝をひやし、又談合して、昨日の御返事をつかはさるべしと、懇懃こんきんにいうて取りて參れと、家來を白眼びらみつけて又五助方に遣れば、五助分別して、沙汰せざる事に此方より狀を付くるは却て無調法なり、されども言はぬといふを是非とも相手にすべしといふも、道理しらずになるに似たり、但し元左衛門が聞き違なるも覺束なし、もし實にいひたるにしても、狀付けられの上うへに申さぬといふ程の腰ぬけなれば、相手にして面白からずと思ひか

へして、御断りを承り届くる上は、互に意趣ふくみ申さずとの返事を見て、三人の者ども二三度おしいただし、扱も大事の命を拾ひたりと、祝酒など飲んでよろこび、まづ其通りにて濟みけり。

其後途中にて逢ふ度毎に、何とやら氣味わるく、其上此事誰いふともなく、果し狀付けられて訛事したりとの取沙汰かくれなく、かれこれ心よからず、三人寄合ふごとにこれを苦にして、此比の取沙汰聞きてむやくしき事といへば、我々も左様におもふ、何とぞして五助を殺す分別は有るまじきかといへば、あれ程の手者てしよなれば、先づ太刀打はとてもかなはず、とやかく案じ入て、白右衛門小聲になつて言ひけるは、先日あきの意趣互に少しも残らぬ中直りに、無菜の振舞に是非呼請け、食類たべに和へて一服さすれば、骨折らずしてころりとやるがといへば、これに過ぎたる手段なしと、日限をさだめ、御茶進じたきよし五助方へいひやれば、さして進まざれども、

行かねば先度の意趣残るやうなりと心得、忝し、參るべしと返事するに、其日いづれも相伴にて、馳走様々なる體にもてなし、後段濟むと心もち例ならず、宿にかへると、五體血筋引て身をもだえ、半時ばかり惱み、血を吐いて息絶えぬ。前廉より醫者もそれとは見ながら、大事の事なれば聊爾に言出さず、不思議なる病とばかり評判して、其なりけりに野邊の送り、人は煙のたね、一子五七郎幼少なれば、本知半分にて跡目立ちて濟みぬ。

彼者どもは仕済ましたりとよろこび、此内證は誰もしらず、過ぎ行く春は夏にかはり、此三人の者は平生兄弟同前にかたり、たとひ如何なる事ありても退くまじきかたらひなしぬ。其日は白右衛門方にあつまりて雑談する次に明くれば、端午の節句、月代さかやきを剃るべし、幸ひ其方家來關内髪月代よくいたすよし、頼むべしといへば、云つて剃らせけるに、折ふしの夕立しきりに降りて、雷耳のあたりに轟きわたり、はや落ちかゝるかと思

えし時、瀧之進日來雷公をこはがる事人に勝れたれば、このひびきに動顛して、關内まづ待ちてくれよと、半分頭剃りかけしを、慌てて立ちさわぎ、天井の板の厚き所はないかと逃廻り、脱捨てし單羽織の有程引かぶり、桑原々と身を縮め、片隅に倒れ伏したるをかしさ。白右衛門、用助大笑ひして、扱も結構なる御侍、それ／＼又光りたるはと威しかけて興がりけるに、程なく空はれて後、瀧之進這出しを、その頭つきはどこの去荷物を持たれしぞ、扱も臆病千萬なりとおどけたるを、瀧之進蟲にさはり、最前も笑物にするのみならず、卑怯なる侍などいはれ、それさへ心にかゝる人には物のいひやうあり、雷は武邊の外、好きといふ者なし。もし卑怯の穿鑿ならば、其方達こそ侍畜生なりと、顔色をかへていへば、座輿に思ひし兩人もこの一言に堪忍ならず、侍畜生とは何ぞと刀を取りまはす時、されば過ぎし年熊井五助と太刀打はならずとて、何ぞや女童のたくむ毒藥を以て

殺す、勿論我は同心にあらざれども、それを改むれば傍輩の因を空しくすると思ふばかりに黙りぬ、何とそのしかたが侍の言出だす事かと、同じく刀を取りまはすに、兩人目を見合はせ、南無三寶、内輪破して、大事の事を人に洩らす悪人と、二人して切伏せ、まづ門をうたせ、心靜かに支度し、路金まで才覺し、直に勢州長島に知れる者ありて立退きける。此事意趣はたしかならずして國中にかくれなし。

爰に瀧之進が一子角之丞、御暇申上げて敵規ひに立ち出で、諸國尋ねめぐり、此度は東海道にかゝり、それとも知らず此長島に入て一日逗留するに、彼の二人の者は蘆屋町針立の賢意といへる者を頼みて居しが、今は糧皆無になし、亭主は固より貧しければ、爲んかたなくて門謠、編笠深く冠り、連節に小濱町を通るを、角之丞見付けて詞をかけ、敵二人を薄手をも負はず物の見事に打ちおほせ、此首國の土産にと下人に持たせて、夜を日

に繼いで屋敷に歸り、母に對面して簡様々々と語る詞を押しとゞめ、それは聞くまでもなし、先づ聲を高くするな、扱も父瀧之進をはじめ、白右衛門、用助先年五助に遺恨有て毒藥にて殺したるよし露現あり、子息五七郎親の敵は其方ならびに白右衛門、用助と、一昨日討ちに出たり、しばらくも爰にはたまられず、我も諸共にいづくへも退くべしと、其夜の九つ過に、又密に家久しき下人一人めしつれ、親子伴ひて立出で、江州醒井の宿にしるべを頼みて、世の憂き住居をとゞめける。

扱又五七郎は三人をねらひて、國々残らず姿をやつして廻り、今は勢州鳥羽に著きて旅籠する宿に一夜を明かすに、障子のあなた旅人の物語するを聞けば、扱も先月十八日長島にて敵打の段々聞くほど、角之丞が有様なり。此上ははや三人の敵二人は相果てたり、残多き事ながら力なき仕合、さだめて角之丞は本國に歸るらんと、それより引返して又本國に急ぎて行

けば、醒井の宿何心なく打過ぐるに、比は極月十三日、家々煤拂とて諸道具大道に積重ねしを取入るゝに、古籠を釣れる貧家に似合ざる鑓、長刀、葛籠の上に挑灯くゝり付け、其袋の紋井筒の内に若松、これは敵の乙見が定紋なると氣を付けて、其隣なる家に立寄り、龜忽ながら此北隣の御亭主は何人にてさふらふといへば、されば主はつひ見たる事なし、伊勢の浪人衆とやら聞き及びたりといふに、いよいよ覺束なく、それより辻堂に行きて、小者に持たせし著籠取出だし、身拵へするうちに、小者に、汝は旅人の體して見聞して參れと云付けしに走り行き、駕籠をかりたしといふ調子にはひりて、様體やうたい見届けてかへり、成程角之丞殿にまがひなしといふに、踏み込んで名乗りかけし時、角之丞は水風呂に入りながらこの體を見て言葉をあはせ、母親に刀給はれといへるに、五七郎これを見るより、その體をば討たず、心靜かに支度致さるべしといひ捨てて、表に出づれば、母親

浴衣をうちきせ、いさぎよくすべしといさめて、簾の内に見物して、互に汗水になつて戦ふうちに、五七郎刀の目釘はしりて落ちたるに、弓矢八幡運命盡きたりと、差添ぬかんとせし隙間をたゞみかけて撃つを、母親これを見て、角之丞しばしと止め、其方は道をしらぬ男かな、最前此方湯あがりの支度を待ち給はずや、其心底を顧みず心なき仕方と恥ぢしめ、随分心靜かに目釘をとめ給へと、その間を待たせて、又打合ひけるが、角之丞深入して指三本落されて、ひるむ所に踏込んで大袈裟に討留め、あら嬉しや年來の本望遂げたりと、息をつぐ所へ母親かけ出、さても遊ばしたりと、角之丞が死骸をつくく、眺めながら、涙をば流さず、誠に我が子ながらも心の剛なる事は、中々御自分におとる者にあらず、されども父瀧之進武士の本意に背きたる冥理の程、弓矢神にも見はなされし天罰のがれずして角之丞に報いて、只今御手にかゝりたり、討つも討たるゝも武士のならひ、

天晴神妙なる御はたらき、御父五助殿草葉の蔭にても嬉しと思しめさん、爰にてほろりなみだぐみ潜然、我が身は頼みなき者なれば、思ふにまかせぬ憂きに憂きを重ぬる事の行くへこそ定め無けれ、角之丞が跡をばよきに弔ひて給はれと、言捨てて内に入り、黒羽二重の羽織を取出だし、これは角之丞に著せんと思ひしばかりにて、いまだ手も通さず、これを道すがらの風厭ひにあそばせと持ちて出でし、此御心底忝しと暇乞して、本國に歸るを、懇に見おくり、それより濃州關の藤川といふ里の側に草の庵を結びて、行ひすませし心の水のあはれをとゞめけり。

——井原西鶴 武道傳來記——

行水でしるる人の身の程

白妙に降りつゞきて、下野國黒髮山も夜の間に姿の變りて老の首と見な

しぬ。年の重ねてむかし語り聞きしは、那須の何がし殿に勤めし菅田傳平、陰山宇藏、此兩人申出して、けふの雪の面白きに、いざ追鳥狩をはじめ、酒の肴に雉子四五羽、手に取りたるやうに勧めければ、いづれも飛出る若者ども、三十餘人さそひ合せ、其身輕行に拵へ、手毎に棒乳切木、或は割竹にて敲立て、驚く鳥のほろろうち弱りしを捕へける。

或人申せしは、此原の殺生石にとまりし諸鳥たちまち落ちて、骨をもをらず擱取といへば、おのおのこれは不思議と、其石の邊に行きて見しに、人の申せしに違はず、とまらむとすればそのまゝ、轉落ちて、鳥鳶に限らず、殊更驚はもろく、山鳥のおのが命しらず、飛びかゝつて落つるを、皆々取る事を論じて駈著けしに、いまだ片息にして駈廻りしを、あなたこなたに追付、終に捕へてそれよりすぐ鍋掛の里に行きて、鳥どもを毛焼して萩柴をりくべ、酒事になして寒さをしのぎけるに、菅田傳平申せしは、彼

の石に落ちたる鳥はかならず中る事なり、そも人に寄るべしと申せば、なまぬるき世の中、堪忍せざる若者命惜しからずと、胴殻焼きかしらまで餘さず暴食の中に、熊川茂七郎思案顔して喰はざりしに、之を見て心ある人はいづれも用捨して、酒ばかりを飲みくらしけるに、高砂丹兵衛横手を打て、茂七郎殿の長生、鳥をまゐらぬ人々は五百八十年も生残りて見給へと、四五度も申しければ、茂七郎おつ取り、立つ所を皆々引きとゞめ、子細なく假宿を立ちて歸りさまに、人の透間を見て丹兵衛を待伏せして、最前の事覺えたかと、一文字に打つてかゝれば、丹兵衛もおくれぬ男にて、しばらく切結ぶうちに、茂七郎運盡きて棚橋にあがりしに、薄雪にて朽木の穴見えずして、太股までこれに踏込み、身のはたらきなりがたく、打留められける。それより丹兵衛行方しらず退きける。

茂七郎一子茂三郎七歳なれば、敵討つ事も果てしなく、母親歎きの中に

そだてあげて十六歳になりぬ。されども丹兵衛見知らざりければ、たとへ廻合ひても討つべき便なく、又後見頼む方もなく、明暮無念をかさねける。やう／＼思ひ出して、因幡なる伯父を頼みて丹兵衛を討たすべし、汝の父のためには兄なれども、様子あつて挨拶悪しく久々不通なりしが、此度立越え頼みなば、よもや外には見捨て給ふまじと、文こま／＼と書き認め、茂三郎を仕立て、熊川茂左衛門殿かたへ遣はしけるに、旅の日數をかさねて、因幡國に著きて尾形に尋ね入り、ありし事ども語りければ、茂左衛門涙を流し、茂七郎に恨みの事ども忘れ、その丹兵衛悪し、我助太刀して是非本望を達せさすべし、心やすかれと頼もしく請合ひ、御暇申請け、茂三郎を伴ひ、諸國を尋ねめぐりに、丹兵衛も何國を定めず、森澤團齋といふ浪人に鑓の名人有りしが、一向これを頼みにして、上下八人にして或時奈良の都猿澤の池の前なる宿にとまりけるに、時節と隣に茂三郎も一

宿せしに、互にかくとは知らざりし。夕暮になりて、下々水風呂に入りしに、かたみ替りに後を流しけるに、背中空所もなく灸をすゑけるに、けふあつて明日しれぬ身なるに、何か養生入るべし、萬に付けて憂世といへば、いかにも世に隠るゝ主を持ちて、いづれ定めがたき身とつぶやきける。

茂三郎小者垣越に聞きて、かゝる事を申す者ありと語りけるに、茂左衛門密に裏に出でのぞき見しに、年月ねらひし丹兵衛なればをどりあがりてよるこび、それより心をつけて聞合せけるに、あすは七つ立にして伊賀越に行くとして、はや出立焼くなど、馬を約束し、用意せはしきに、こなたは随分沙汰なし、夜半に立つて道すがら足場のよき所を見繕ひしに、よき所もなく、既に伊賀上野になりて詮ずる所爰に極め、まがりとの角を見立て、以上四人いさみて酒屋に入りて釣掛升に引請けて、それながら差しつ差されつ心祝ひして、縁がはに腰をかけてゐならば、其日も八つの下りに

なりて、乗掛二匹を追立て、上野の宿に入りけるは、互にあやうき所なり。團齋得ものの鎗持、町はづれの屋根にもたしかけて、雪隠に入りけるは、丹兵衛が武命の盡なり。茂三郎馬の眞先に向ひ、熊川茂七郎が悴子茂三郎、親の敵うつごと、名乗り懸けて切る太刀に高股落して、ひらけば丹兵衛抜合はせ、一命爰にして戦ひしは、天晴武士の働きなりなり。時に團齋飛び下り助太刀うつを、茂左衛門横手なぎて、兩方手者なれば暫が程秘術を盡しける。されども茂三郎茂左衛門利の刃なれば次第に強く、うち留めて止めを刺し、其身も深手なれば死骸に腰を掛け、息をつぎける内に、其國の守より大勢駆著け、いさめて歸る。古今武士の鑑、刀は鞘にをさめ、御代長久、松の風静かなり。

——井原西鶴 武道傳來記——

世界の借屋大將

借屋請狀之事、室町菱屋長左衛門借屋に居申され候藤市と申す人、慥に千貫目御座候、廣き世界にならびなき分限我なりと自慢申せし、子細は二間口の棚借にて千貫目持、都のさたになりしに、烏丸通に三十八貫目の家質を取りしが、利銀つもりておのづから流れ、始めて家持となり是を悔みぬ。今までは借屋に居ての分限といはれしに、向後家有るからは京の歴々の内藏の塵埃ぞかし。この藤市利發にして一代のうちにかく手まへ富貴になりぬ。第一人間堅固なるが身を過ぐる元なり。

此男家業の外に反古の帳をくくり置きて、見世をはなれず、一日筆を握り、兩替の手代通れば錢小判の相場を付け置き、米問屋の賣買を聞き合せ、木藥屋呉服屋の若い者に長崎の様子を尋ね、操綿鹽酒は江戸棚の状日

を見合せ、毎日萬事を記し置けば、紛れし事は爰に尋ね、洛中の重寶になりける。不斷の身持、肌に單縹絆大布子綿三百目入れて一つより外に著る事なし。袖覆輪といふ此人取りはじめ、當世の風俗見よげに始末になりぬ。革足袋に雪踏をはきて、終に大道をはしりありきし事なし。一生のうち絹物としては紬の花色、一つは海松茶染にせしこと若い時の無分別と、二十年もこれを悔しく思ひぬ。紋所を定めず、丸の内に三つ引又は壹寸八分の巴を付けて、土用干にも疊の上には置かず、麻袴に鬼縹の肩衣幾年か折目正しく取り置かれける。町並に出る葬禮には、是非なく鳥部山におくりて、人より跡に歸りさまに、六波羅の野道にて奴僕もろ共苦參を引いて、これを陰干にして腹藥なるぞと只は通らず、跪く所で燧石を拾ひて袂に入れける。朝夕の煙を立つる世帯持は、よろづか様に氣を付けずしてはあるべからず、此男生れ付て愼しほきにあらず、萬事の取りまはし人の鑑に

もなりぬべき願ひ、かほどの身袋しんたいまで年とる宿に餅搗かず、闇敷いそがしき時の人遣ひ、諸道具の取り置きもやかましきとて、これも利勘にて大佛の前へあつらへ、一貫目に付き何程と極めける。十二月廿八日の曙、いそぎて荷ひつれ、藤屋見世にならべ請取り給へといふ。

餅は搗きたての好もしく春めきて見えける。旦那は聞かぬ貌して十露盤置きしに、餅屋は時分柄にひまを惜み、幾度か斷りて、才覺らしき若い者、杜斤ちぎの目りんと請取りてかへしぬ。一時ばかり過ぎて今の餅請取つたかといへば、はや渡して歸りぬ。この家に奉公する程にもなき者ぞ、温もりのさめぬを請取りし事よと、又目を懸けしに思ひの外に減かへのたつ事、手代我を折りて喰ひもせぬ餅に口をあきける。その年明けて夏になり、東寺あたりの里人、茄子の初生を目籠に入れて賣り來るを、七十五日の齡是たのしみの一つは二文、二つは三文に直段を定め、何れか二つとらぬ仁はなし。

藤市は一つを二文に買ひていへるは、今一文で盛りなる時は大きながあらりと、心を付くる程の事あしからず。屋敷の空地に柳柎ゆつりは櫻桃の木、花菖蒲じゆず菫仁など取りまぜて植ゑ置きしは、ひとり有る娘がためぞかし。葭垣に自然と朝貌のはへかゝりしを、同じ詠めにははかなき物とて、刀豆に植ゑかへける。

何より我が子をみる程面白きはなし。娘おとなしく成りて、頓て嫁入屏風を拵へとらせけるに、洛中盡しを見たらば見ぬ所を歩行たがるべし、源氏伊勢物語は心のいたづらになりぬべき物なりと、多田の銀山出盛りし有様書かせける。此心からはいろは歌を作りて誦ませ、女寺へも遣らずして筆の道を教へ、ゑひもせず京のかしこ娘となしぬ。親の世智なる事を見習ひ、八歳より墨に袂をよごさず、節句の雛遊をやめ、盆に踊らず、毎日髪かしらも自ら梳きて、丸曲に結ひて、身の取廻し人手にかからず、引きな

らひの眞綿も著丈の堅横を出かしぬ。いづれ女の子は遊ばすまじきものなり。折ふしは正月七日の夜、近所の男子を藤市かたへ、長者に成る様の指南を頼むとて遣しける。座敷に燈かゝやかせ、娘を付け置き露路の戸の鳴る時しらせと申し置きしに、此娘しほらしくかしまり、灯心を一筋にして、嘖もつらうの聲する時、元のごとくにして勝手に入りける。三人の客座に著く時、臺所に摺鉢の音ひきわたれば、客耳をよろこばせ、これを推して皮鯨の吸物といへば、いやいやはじめてなれば雑煮なるべしといふ。又ひとりよく考へて煮麩にらめんとおちつきける。必ずいふ事にしてをかし。

藤市出でて三人に世渡りの大事を物語りして聞かせける。一人申せしは、今日の七草といふ謂れはいかなる事ぞと尋ねける。あれは神代の始末はじめ、増水と云ふ事を知らせ給ふ。又一人掛鯛を六月まで荒神の前に置きけるはと尋ぬ。あれは朝夕に肴を喰はずにこれを見て喰うた心せよと云

ふ事也。又太箸をとる由來を問ひける。あれは穢れし時白げて一膳にて一年中あるやうに、これも神代の二柱を表すなり、よくよく萬事に氣を付け給へ、扱宵から今まで各咄し給へば、最早夜食の出づべき所なり、出さぬが長者に成る心なり、最前の摺鉢の音は、大福帳の上紙に引く糊摺らしたといはれし。

——井原西鶴 日本永代藏——

見立てて養子が利發

和國の商ひ口とて利徳をとらぬと空誓文をたつれば、これに氣をゆるし、何によらず買ひ求むる世のならばしなり。神田の明神の前に俗性歴々の浪人、身を隠して、年も家に杖つく比なれば、さのみ主とりの望もなく、小者一人つかうて一代のたくはへ有つて、世をなりはひに暮らし、徒

居を外よりの咎をうたて、瀬戸物見せかけばかり出し置き、直段とふものあれば、百の物を百とありのまゝにいひければ、是をねぎれどまけず、そもくより摺鉢九つ肴鉢十三皿四十五枚天目二十徳利七つ油さし二つ、三年あまりに一つも賣れず。これを思ふに、商ひ上手はあるべき事なり。年中の誓文を十月二十日ゑびす講にさらりとしまふ事あり。その日は、諸商人萬事をやめて我が分限に應じ、いろく魚鳥を調べ、一家集りて酒くみかはし、亭主作り機嫌に下々いさみて、小歌淨瑠璃江戸中の寺社芝居、其外遊山所の繁昌なり。上方とちがひし事は白銀は見えず、一步の花をふらせける。秤いらずにこれ程よき物はなし。人みな大腹中にして諸事買物大名風にやつて見事なる所あり。けふのゑびす講は萬人肴を買ひはやらかし、自然と海も荒れて常より生物をきらし、殊に鯛の事一枚の代金一兩二分づつ、しかも尾かしらにて一尺二三寸の中鯛なり。これを町人の分とし

て内證料理につかふ事、今お江戸にすむ商人なればこそ喰ひはすれ、京の室町にて鯛一枚を二匁四五分にて買取り、五つにわけて天秤ちびにかけて取るなど、これに見合せ都の事をかし。

爰に通町中橋の邊に錢見せ出して、若い者あまた使へる人あり。日來は始末第一の人なれど、一兩二分の鯛を調べて、ゑびすの祝儀をわたしけるに、いづれも何心もなく夕飯を祝ひぬ。大勢のわかい者の中に、此程伊勢の山田のものとして、十年切つて抱へたる十四になる小者、すわりし膳を二、三度いたゞき、飯くはぬ先に十露盤置いて、御江戸へ來りて奉公を致せばこそ、かゝる活計にあふ事よと、ひとりつぶやきてこれを喜ぶ風情、主人の目にかゝりて子細を尋ねられしに、されば今日の鯛の焼物一兩二歩にて背切十一なれば、一切のあたひ七匁九分八厘づつに當るなり、小判は五十匁五分の相場に仕る算用してからは、銀を噛むやうなる物なり、鹽鯛干

鯛も昔は生なれば祝ふ心は同じ事、けふの腹も常にかはらぬ事と申せば、亭主横手をうつて、さりととは利發もの、分別ざかりの手代どもさへ何のわきまへもなく、箸は右の手にもつ物とばかり心えて、主の恩をも知らざるに、いまだ若年にして物の道理を知る事、天理に叶ふべきものなりと、親類中をよびよせ、段々物がたりして、此者を養子分にして、我が家をゆづるべしと、一筋に夫婦共に思ひ入りて、伊勢の親もとへ相談の人つかはしける時、小者其中へまかり出で、いまだお馴染もなきうちに、御心入の程はかたじけなし、然れども國もとへの御使は御無用なり、首尾せぬ時はそれほどの費なり、殊に御内證の事、世は張物なれば手まはしばかりにて、大分の借金の有るも存せず、よくよく見届け申さぬうちに、養子の契約は成りがたしと申せば、なほ此言分を感じ、其方が心もとなき事尤なり、さりながら一錢も人の物を借らずと、毎年の勘定帳を見せければ、有金二千

八百兩としらせ、此外金子百兩女房後々寺参り金に、此五年前にのけて置きけると、包みながら封じ目に年號月日書き付け置きぬ。小者これを見て、さてもさても商ひ下手なり、包み置きたる金子は一兩も多くはなるまじ、利發なる小判を長櫃の底に入れ置き、年久しく世間を見せ給はぬは、商人の形氣にあらず、此心から大分限になり給はず、頭のはげるまでこの御江戸に居ながら、やうく三千兩の身躰、これを大きな貌つきあそばしける。わたくし養子になさるゝからは、四五年の内に江戸三番ぎりの兩替になる事、長生して見給へ、まづ夫婦衆はけふより毎日談義ある寺参りし給ひ、その下向に納所坊主にちかより散錢有る程買ひ給へ、世帯佛法二つの徳あり、供のでつちは道の間の外聞なれば、浮世山椒をうけて小袋に入れ行き、法談はじまらぬさきに、諸人のねぶりざましにこれを賣るべし、さてまた供つれぬ参り衆の笠杖草履を談義はつるまで、一錢づつにて

預れと云ひつかはしけるに、毎日錢まうけして主人の供もつとめける。かのごとく萬事に氣を付け後には思ひのほかなる智恵を出して、舟つきの自由させる行水舟をこしらへ、刻昆布して目にかけて賣り出し、ちやんぬりの油かはらけ、しほ紙の煙草入、外の人のせぬ事に、十五年たゝぬうちに、三萬兩の分限になつて、靈岸島に隱居して、ふたりの養親に孝をつくしける。いかに繁昌の所なればとて、常の働きにて長者には成りがたし。三文字屋といへる人、むかし懷中合羽を仕出し、それより馬道具の仕込次第にさかえて、本朝の織絹唐物を調べ、毛類は猩々緋の百間つゞき、虎の皮千枚にても、黄羅紗紫羅紗、都にも無いものを持丸長者とさたせられ、中橋に九つ藏とてかくれなし。これらは各別の一代分限、親より譲りなくては、すぐれて富貴にはなりがたし。京の室町歴々人の男子、何も商賣なしに善五郎などを頼み、大分の銀がしして世をわたり、此利銀毎日二百三十

五匁づつのつもりに入れけるに、何やうにかつかひ果しける。十五年がうちこの財寶みななし、江戸へかせぎに下りける。此男の器用さ、謠は三百五十番覚え、碁二つと申し、鞠は紫腰を許され、楊弓は金書ぐらゐ、小歌は本手の名人、淨瑠璃は山本角太夫とかたりくらべ、茶の湯は利休が流れを汲み、文作には神樂願齋もはだして逃げ、枕がへしなどはいにしへ傳内に横手をうたせ、連誹も當流の行きかたを覚え、香を聞く事、京にも並びなし。人中にて長口上もいひかねず、目安も自筆に書きかねず、何に一つ暗からねど、身過の大事をしらず。當所もなく江戸に下りて奉公するに、銀見るか算用かといへば、さしあつて口をしく、諸藝この時の用に立たず、二たび京都にのぼりて、とかく住みなれし所よしと、年月したしみの友をたのみて、謠鼓の指南して、やう／＼身一つくらし、不斷の自由を松ばやしの時質うけて又おく事やすし。この分にて通るべきや、人間

の身はわづらひある物と老さきの事を案じける。もつとも六十年はあくりて六日の事暮らしがたし。これを思ふに、それ／＼の家業油断する事なかれと、さる長者のかたりぬ。

——井原西鶴 日本永代蔵——

鼠の文づかひ

毎年煤拂は極月十三日に定めて、旦那寺の笹竹を祝物とて、月の數十二本もらひて煤を拂ひての跡を、取り葺屋根の押へ竹に使ひ、枝は箒に結はせて、塵も埃も捨てぬ随分細かなる人ありける。過ぎし年は十三日に急しく、大晦日に煤はきて、年に一度の水風呂を焼かれしに、五月の粽のから、盆の蓮の葉までも段々に溜め置き、湯の沸くに違ひはなしとて、細かな事に氣をつけて、世の費穿鑿、人に過ぎて利發顔する男あり。同じ屋敷

の裏に、隠居建て、母親の生まれしが、此男生まれたる母なれば、其吝き事限りなし。塗下駄片足なるを、水風呂の下へ焼く時、つく／＼昔を思ひ出し、まことに此木履は、我十八の時此家に嫁入りせし時、雑長持に入れた来て、それから雨にも雪にも履きて、齒のちびたるばかり五十三年になりぬ。我一代は一足にて埒を明けんと思ひしに、惜しや片足は野良犬めにくはへられ、端になりて是非もなく、今日煙になす事よと、四五度も繰言をいひて、其後釜の中へ投げ捨てられ、今一つ何やら物思ひの風情して、泪をはらはらと溢し、世に月日のたつは夢ぢや、明日はそのむかはりになるが、惜しい事をしましたと、少時歎きのやみ難し。折節近所の醫者水風呂に入られしが、先づ以て目出度き年の暮なれば、御嘆きをやめさせ給へ、してそれは元日に何人の御死去なされたと尋ねられしに、いかに愚痴なればとて、人の生死をこれ程に歎く事ではござらぬ、私の惜むは去年の

元日に、堺の妹が禮に參つて、年玉銀一包くれしを、何程か嬉しく惠方棚へ上げ置きしに、その夜盗られました、そもや勝手知らぬ者の取る事ではござらぬ、其後色々の願を諸神に懸けますれどもその效もなし、又山伏に祈を頼みましたれば、此銀七日の中に出ますれば、壇の上なる御幣が動き、御灯が次第に消えますが、大願の成就せし驗といひける。案の如く祈最中に御幣動き出で、灯火微になりて消えける。これは神佛の事末世ならず有難き御事と思ひ、お初穂百二十上げて七日待てども此銀は出ず、さる人に語りければ、それは盗人におひといふ物なり、今時仕懸山伏とて、さま／＼護摩の壇に操いたし、白紙人形に土佐踊さすなど、此前松田といふ放下師がしたる事なれども、皆人賢過ぎて結句近き事にはまりぬ、其御幣の動き出るは、立て置きたる岩座に壺ありて、其中に鱸を生け置きける、珠數さら／＼と押し捫んで、東方に西方にと、獨鈷錫杖にて佛壇を暴けな

く打てば、鯨がこれに驚き上を下へと騒ぎ、幣串に當れば暫く動きて、知らぬ目からは恐し、又灯明は臺に砂時計をしくはし、油を抜き取る事ぞと、此物語を聞くから、いよ／＼損の上の損をいたした、我此年まで錢一文落さず暮せしに、今年の大晦日は、此銀の見えぬ故胸算用違ひて、心がかりの正月をいたせば、萬の事面白からずと、世の外聞も構はず大聲上げて泣かれければ、家内の者ども興をさまし、我々疑はるゝ事の迷惑と、心に諸神に祈誓を懸ける。

大方煤もはき仕舞ひて、屋根裏まで検めける時、棟木の間より杉原紙の一包を探し出し、よく／＼見れば、隠居の尋ねらるゝ年玉銀に紛れなし。人の盗まぬ物は出ますぞ、さる程に悪い鼠めといへば、お祖母中々合點せられず、これ程遠歩きする鼠を見た事なし、頭の黒い鼠の業、これからは油断のならぬ事と、疊たゝきて喚かれければ、薬師水風呂より上り、か

ゝる事には古代にも例あり、人皇三十七代孝徳天皇の御時、大化元年十二月晦日に、大和國岡本の都を難波長柄の豊崎に移させ給へば、和州の鼠も連れて宿替しけるに、それ／＼の世帯道具をば運ぶこそ可笑しけれ。穴をくろめし古綿、鳶に隠るる紙衾、猫の見つけぬ守袋、鼬の道切るとがり杭、升降しのかいづめ、油火を消す板切れ、鯉節引く挺枕、其外嫁入の時の慰斗、鱒なまめの頭、熊野参りの小米苞まで、二日路ある所を咄くはへて運びければ、まして隠居と母屋わづかの所引くまじき事にあらずと、年代記を引て申せど、中々同心致されず、口賢くは仰せらるれども、目前に見ぬ事は實にならぬと申されければ、何とも詮方なくやうやう案じ出し、長崎水右衛門が仕入れたる鼠使ひの藤兵衛を雇ひに遣し、只今あの鼠が人のいふ言を聞き入れて様々の藝盡し、若い衆に頼まれ戀の文使ひといへば、封じたる文咄へて後前を見廻し、人の袖口より文を入れける。又錢一文投げて、こ

れで餅買うて來いといへば、錢を置いて餅咀へて戻る。何となく我を折り給へといへば、これを見れば鼠も包金を引くまじき物にあらず、さては疑晴れました、さりながらかゝる盗心のある鼠を宿仕られたる不祥に、満丸一年此銀を遊ばして置きたる利銀を、屹度母屋から濟まし給へといひ懸り、一割半の算用にして、十二月晦日の夜請取り、本の正月をするとして、この祖母獨寢をせられける。

— 井原西鶴 胸算用 —

銀一匁の講中

人の分限になる事、仕合せといふは言葉、實は面々の智恵才覺を以て稼ぎ出し、其家榮ゆる事ぞかし。これ福の神の戎殿のまゝにもならぬ事なり。大黒講を結び、當地の手前よろしき者ども集り、諸國の大名衆への御

用銀の貨入れの内談を、酒宴遊興よりは増したる世の慰みと思ひ定めて、寄合ひ座敷も色近き所を去つて、生玉下寺町の客庵を借りて、毎月身代詮議にくれて、命の入日傾く老體ども、後世の事は忘れて、只利銀の重り富貴になる事を楽しみける。世に金銀の餘慶ある程、萬につけて目出たき事外になけれども、それは二十五の若盛りより油斷なく、三十五の男盛りに稼ぎ、五十の分別盛りに家を納め、惣領に萬事を渡し、六十の前年より樂隠居して、寺道場へまゐり下向して、世間向のよき時分なるに、佛とも法とも辨へず、欲の世の中に住めり。死ねば萬貫持つても、帷子一つより皆浮世に残るぞかし。

この寄合ひの親仁ども、二千貫目より内の分限一人もなし。又近年我々が働きにて、少なる身代の者共金銀を仕出し、二百貫目三百貫目或は五百貫目までの銀持二十八人語らひ、一匁講といふ事を結び、毎月宿も定め

ず、一匁の仕出し飯を誂へ、下戸も土戸も酒なしに、遊び事にも始末第一、氣のつまる穿鑿なり。朝から日の暮るゝまで、餘の事なしに身過の沙汰、中にも貸銀の確なる借手を吟味して、一日も銀をあそばさぬ思案を廻らしける。此者どもが手前よろしくなりける始め、利銀取込みての分限なれば、今の世の商賣に銀貸屋より外にはよき事はなし。然れども今程は見せかけのよき内證の不埒なる商人、大分借込み拵へて倒れければ、思ひもよらぬ損をする事度々なり。されども人を氣遣して、金銀貸さずにも置かれず、随分内證を聞き合せ、この仲間は互に様子を知らせ、向後は貸入をいたすべし、いづれも斯くいひ合すからは、出抜にあはし給ふな、さあらば各心得の爲めに、當地で定まつて銀借る人を一人一人書き出し、細かに詮議して見るべし。これ尤なり、先づ北濱で何屋の誰、財寶諸色かけて七百貫目の身代といひ出づれば、その見立は各別、八百五十貫目の借銀とい

ふ。この有り無しの相違に一座の衆中肝をつぶし、爰が大事の穿鑿、兩方の思召入とくと承り、人々の心得の爲めとぞ聞きける。

先づ分限と見たる所は、去々年の霜月に娘を堺へ縁組せしに、諸道具今宮から長町の藤の丸の膏藥屋の門まで續きし、後から十貫目入り五つ、青竹にて揃への大男にさし荷はせ、其まゝ御祓の渡る如し。外にも數多の男子あれば、餘慶なくて娘に五十貫目はつけまいと思ひまして、嫌といふ物を無理に、この三月過ぎに二十貫目預けましたといはるゝ。扱々御笑止や、其二十貫目が一貫六百目ばかりで戻るでござろといへば、此親仁顔色變つて、箸持ちながら集汁咽喉を通らず、今日の寄合に口惜しき事を聞きけると、様子を聞かぬ中から泪を溢されける。とても事の事に其内證が聞きたし。されば其聲殿方もよくくせはしければこそ、芝居並の利銀にて何程でも借らるゝなり、此利をかきて芝居の外何商賣して胸算用が合ふと思

召すぞ、十貫目箱一つは金物まで打つて三匁五分づつ、十七匁五分で箱五つ、中には世間に澤山なる石瓦、人の心程恐しきものはござらぬ。兩方の外聞見せかけばかりに内談と存ずる。我等は其箱を明けて正眞の丁銀にしてから誠には致さぬ、あの身代の敷銀は、二百枚も過ぎ物、こしらへなしに五貫目、何と各我等が沙汰する所が違うたか、先づあれには一兩年、二貫目ばかり預けて見て、それに別の事なくば、又四貫目程五六年も貸して、確なる事を見届けての二十貫目といへば、一座これ尤もと同音に申す。段々理につまつて、此親仁歸りには足腰立たずして嘆き、我此年まで人の身代見違へし事のなきに、此度は不覺なる事を致しましたと、男泣きにして、何卒御分別はないか〜とあれば、時に最前の世智賢き人のいふは千日千夜御思案なされても、此銀子無事に取り返す工夫は只ひとりより外になし、此傳授上々の紬一疋ならば、確に取り返して進上申すといへ

ば、それは〜中綿まで添へまして御禮申さう、何とぞ頼むといふ。

然らば只今までより懇ろに仕懸け、天満の舟祭が見ゆるこそ幸なれ、濱に懸けたる棧敷へ女房どもをおこして見せたと、廿五日に御内儀をやりて、先の噂と染々と内證を語らせ、一日遊ぶ中に息子どもが馳走に出るは知れた事ぢや、時に二番目の息子が生質を譽め出し、賢さうなる眼ざし、此方の御子息にしては、お心に懸けさしやるな、鳶が孔雀を生んだとは此子の事、玉の様なる美人近比押しつけたる所望なれども、私もらひまして聲にいたします、酒一つ過しまして言うではござらぬ、我等が子ながら、これ娘も十人並に、其上親仁の一人子なれば、五十貫目つけてやるとは常々の覺悟、又我等が私銀三百五十兩、長堀の角屋敷捨賣りにしても、二十五貫目が物、してから袖も通さぬ衣裳六十五、一人の娘より外にやる者がござらぬ、是がこちらの聲殿と、思ひ入りたる顔付して、これを言葉の始め

にして、其後折節少しづつ物をやればかへしを受け、これ以て損のいかぬ事、それよりよい程を見合せ、やとひに遣はし、銀懸くる傍に置きて、數をよませ極印を打たせ、内藏へ運ばせなどして、一日使うて歸し、其後先の身になる人を見立て、竊に呼びに遣はし、其人の二番目の子を、女房どもが何と思ひ入りましたやら。是非にと望みます、急がぬ事ながら序もあらば、此方の娘を貰うても下さるか、尋ねて下され、こなた方へ取りつくるうて申す事もござらぬ、銀千枚は何方へやりますとても其心得といひ渡し、先へ通じたと思ふ時分に、内々の預銀入用と申し遣はせば、欲から才覺して濟ます事、手にとつたやうなり、この仕懸の外あるまじといひ教へて別れける。其年の大晦日に、彼の親仁門口より笑ひ込み、御蔭々々、御蔭にて右の銀子元利ともに二三日前に請け取りました。此方の様なる智慧袋は、銀貸仲間の重寶々々と頭を叩き、扱其時は袖一疋とは申せしが、これにて御

堪忍あれと、白石の紙子二反差出して、中綿は春の事といひ棄て歸りける。

——井原西鶴 胸算用——

漢學先生

孔叢「どうだ、主人。夙に起き夜に寝てかせぐものだの、」びん「ヤ、これは先生さん、お早うございます。」先生というてはなめげにきこゆる孔「おれは清貧を樂む氣だから、早く起る氣もないが、家鹿の爲に起された。ヤ、あたくて／＼どうもならぬ」びん「嘉六が酒にでも酔つて來やしたかね。」孔「此男は何をいふ。鼠が酒に酔つてたまるものか。ハ、ハ、ハ、」びん「へエわつちは又筋向の嘉六が、例の生酔であたけたかと思ひやした。」孔「何さ、家鹿とは鼠の異名さ」びん「へエ鼠にも表徳がござえやすかね」孔「表徳かはしらぬが、社君だの、家兎だのと、種／＼異名があるて」そばからとめ「左官だ

の、壁だの、とつけるも尤だネ。あいつが壁へ穴を明ちやア、左官さわぎだ」びん「べらぼうめ、だまつてろ」とめ「アイ」トへこんで門口を 孔「獨居して居ると、鼠までが馬鹿に仕をる。一屋無^レ猫老鼠走^ニ白晝^一と左傳にもある通り、おれを侮てどうもならぬ。王肅が逐鼠丸でも欲しいものだテ。」とめ「逐鼠丸とは、京傳の本に書いてありやす。直さま買へやすわな」びん「馬鹿アいへ、あれは讀書丸だわ」とめ「ホンニさうだつけ。」

孔「ドリヤ一ツ刺つてもらはうか」トこし高のたらひへ湯をく びん「コレ留モツト敷居の脇を能く掃けエ。いけんぞんぜへな、べらぼうだ。いくら云つても掃落しやアがる」とめ「アイ」孔「箒千里、惟留が掃かざる所なりだ。アハハ、留は奥を潤し、床は身を潤すといふから、髪結床の隙には、奥の用をたして、水でも汲むがい」とめ「きついお世話さ、関子齋めエ」孔「ナンダ関子齋だア。黄白には富みたいものだナ。汝が們^{ともがら}までおれを安じをる。ハテ残

念関子齋」とめ「ヲツトまづ一ツ関子齋」三人「ハ、ハ、ハ、」孔糞毛受をもつてこしをかくるびん五郎は髪をと 孔「むかふのかべに張付ある寄のかす 孔」びらを見つめてゐたりしが ハ、ア、竹本祖太夫、鶴澤蟻鳳、ハテおつな事があるの。漢には賈太夫など、いふも有つたれど、日本には奇^{めづ}しい。尤秦の始皇帝が松に太夫の官をば與たが、竹に祖太夫の官をやつた古事も覺えずト、扱又鶴澤と置いて、蟻鳳と對を取つた心は、どういふ意であらうナ。コレ主人、あの書たものは。何にするのだの」びん「どれエ」孔「あれ」トゆび びん「あれは座敷淨瑠璃さ、祖太夫に蟻鳳だから、夕も三百ばかり這入やした。孔」ム、。トハいへども根 ハテナ、おれは俗事に疎いから、とんと解せぬ。又こちら 今昔物語ト、何だ朝寢房夢羅久、フウ」トかんがへ、 林屋正藏、ハテナ、風流八人藝ハハア、これは所謂季氏が八僧^{いっ}のたぐひと見えるナ。此季氏も、魯國の太夫だて。僧は舞列也、天子は八ツ、諸侯は六ツ、太夫は四つ、士は二ツ、僧する毎に、人數其僧數の如し。」びん「モシ／＼夫は

何の數でござりやすエ。」孔「是は八佾と云つて、舞の數だ」びん「わつちは又おつに氣どりやした。アハ、、あれはそんな六かしい物ぢやアござりやせん、八人藝と云つて、一人で八人の藝をする盲人さ」孔「ハテナ、盲人ですら八人の業をするに、おれらは兩の眼を持てゐて、一人の行ひがつとまらぬとは、ハテ残念閔子騫」とめ「そりや二ツ」三人「アハ、ハ、ハ」

孔「あの何はどうかな。今と云字の書いてあるのは」びん「ム、あれは今昔物語さ、朝寢房夢羅久、林屋正藏、こつちらの方が圓生さ。どれも上手な咄家さネ。」トはなしてゐる所へでんぼう びん「お早いの」でん「アイ其つきか」びん「まだ隱居さんが一ツある」でん「よし」孔「コレ主人、咄家とはどうしたものだ」びん「落話をする手合さ」孔「ム、笑話か。笑話は漢がおもしろい。山中一夕話の事を、開卷一笑ともいふが、又各別だて。笑笑道人が作つたものだ。まだ遊戯主人が笑林廣記、和本にも岡白駒が譯した開口新語

あるひは笑府のたぐひ、イヤどうも漢は違つたものだて。あの趣向をきやつ等に教へてやりたい。」などといひたがるもの也からのなしを日本に譯しあるひ、職案してあることはしらずこゝが村學究のもちまへ也

びん「唐にも落咄がありますかネ」孔「あるとも」日本のやうな事ではない、甚だ巧なものだ。」でん「そはから口を唐はどうだかしらねえが、江戸の咄家はどれも上手だぜえ、夢羅久が咄するのは、眞の咄だぜのう」びん「さうさ林屋がのもおもしれえよ」びん「おらア圓生がをかしくて能」びん「始終をかしいの」でん「夢羅久のは地が能、どうも情合をうまくいふぜえ」びん「可樂は一世一代をしたぢやアねえか」でん「夫でもスケに出らア」びん「助高屋だの、一世一代をした跡が、又若がへるものよ。」

孔「コレ、足下の一世一代といふは誤だ。それでは重言になるて。あれは一世一度といふものだ。咄家、と、何でも家の字さへ付ればよいことと思ふが、咄家と云ては湯桶訓だ。咄は訓なり、家は漢音だ。吳音では

家とよむてな。都て儒學は漢音、國學は吳音でよむが、又佛氏の方なども吳音でよむ。それは各別、笑話家とか、或は落句にをかしみを取るゆゑ、落話家ともいへばよいに、咄家とは、イヤハヤ實に絶倒。ハ、ハ、ハ、すでに古方家・後世家は漢音、二條家・萬葉家は吳音で唱へる。是等の事を辨へぬとはハテ残念閔子騫。」

でんぼう「そんなら咄家をやめて、笑話家といひやせうね」びん「じかし今のきいたふうは、何でも家の字を付たがるよ」孔「口を能しやべるものを多辯家、物を多く食ふ者を食亂家、或は飽食家」でん「酒をよく飲む者を飲家と云つちやア、夏うるさがるやうだの」孔「それが則湯桶訓だて。酒を呑むものを酒客、酒屋を酒家」びん「ハ、ア酒家が酒家ならば、豆腐やは豆腐家だの」でん「提灯屋は提灯家で、煎餅屋が煎餅家」びん「馬によく騎る人を馬家と云つたら、腹を立つだらう」でん「香をかぐ人を香家と云つちやア、

穢らしいの」孔「さういはれてはたまらぬ、コレ／＼香をかぐ花をさすなどの訶は、古いけれど、まづ花を活る、香はきく、といふが俗例で、耳だたぬてナ」でん「香は鼻で嗅ぐだらう」びん「さうさ、耳へ匂ふはずがねえ」でん「耳できくものなら、香をきくといふが能けれど、鼻だからかぐ方がよからうぜ」びん「さうよ、鼻がきいて耳で嗅う物なら、目が言て、口で見物だの」でん「さう成と、足で頭痛がして、天窓へ踏貫の用心だ」孔「コレ／＼足下のやうに言うては、論が干ない。ア、こまつたものだ、是だから、聖人もおこまりなすつた事、想像れるテ、どうも度しがたい。アッア夷狄に素しでは夷狄を行ひ、郷に入ては郷にしたがふだ。ア情ない。實に嘆息するのみだ。衆人濁酒を飲ば、われも共に飲ねばならぬかい」びん「實に痰嗽をするなら、濁酒は毒だらうネ。それはおやめなせえ」孔「イヤサ、もう對人にならぬて」でん「モシ／＼、もうちつとお講釋を聞きてえネ」孔「イヤ／＼、

愚人と論は無益なり。イヤしからば。」

ト歸る引違へて
いんきよ來る

——式亭三馬 浮世床——

言葉あらそひ

かみ「鱸うなぎなども、御當地のは和やまといばかりで、もみないがナ。上の鱸といふたらまあどないなもんじやい、名高い所がマア、京で上の生洲な、大坂で大正ナ。その外に、川魚屋もまだまあ多おつとあれどナ、玉といふたらの等てきやうじや。何じやろとマア、鐵串かねぐしにさして焼じや。ハ、その焼た跡で能程せいじやうづゝに切てナ、平に入てぎつしりと蓋して出すさかいに、なんぼでもさめるといふ案じがないわいな。」山「江戸じやア、そんなけちな事は流行はやりらねへのさ、江戸前の樺焼は、ぼつぼと湯氣の立のを、皿へならへて出す、たべるうちにさめたら、その儘置て、お代りの焼立をたべるが、江戸子さ。さめると猫に

持行て遣うと、竹の皮へ包で歸る人は、よつぼど勘定高な人さ」かみ「デおますか。夫がマア何で江戸子じやナ。物の廢すたりにならんやうにしてこそ、自慢したか能えいはいな。いしこらしう江戸子じや、何たら角かどたら云ても、上の者の目から見ては、トトやくたいじやがな。自慢らしういふことが、皆へこたこじや、じやによつて、江戸子はへげたれじや、といふはいな。」

山「へげたれでも能えいのさ。江戸子のありがたさには、生れ落から死まで生れた土地を一寸も離れねへよ。アイ、おめへがたのやうに、京でうまれて大坂に住つたり、さまざまにまごつき廻つても、あげくのはては、ありがたいお江戸だから、けふまで暮してゐるじやアねへかナ。夫だから、おめへがたの事を、上方ぜへろくといふはな」かみ「ぜいろくとは何んのことちやエ」山「さいろくト」かみ「さいろくとはなんのこつちやエ」山「しれずばいいわな」かみ「へ、關東べいが、さいろくを、ぜへろくと、けたいな詞

つきじやなア。お慮外も、おりよげへ、観音さまも、かんのんさま、なんのこつちやろな。さうだから、斯だからト、あのまア、からとはなんじやエ」
 山「「から」だから「から」さ。故といふことよ。そしてまた、上方の「さかい」とはなんだへ」
 山「さかいとはナ、物の境目じや。ハ、物の限る所が境じやによつて、さうじやさかいに、斯した境、と云のじやはいな」

山「そんならいはうかへ。江戸詞の「から」をわらひなはるが、百人一首の歌に何とあるエ」
 山「ソレ、最う百人一首じや。アレハ首じやない百人一首じやはいな。まだまア「しやくにんし」といはいで、頼母しいナ」
 山「そりやアわたしが云損にもしろさ」
 山「どこねへじやない、云損じやゑらふ聞づらいナ。芝居など見るに、今が最期だ。観念何たらいふたり、大願成就忝ねへ。何の角のというて、萬歳の才藏のと、ぎつばな男が云うてじやが、ひかり人のないさかい、よう濟んである。」
 山「そりや、上方

もわるい。ひかり人ツサ。ひかるとは稻妻かへ。おつだネエ。江戸では叱るといふのさ。アイそんな片言を申ません」
 山「ぎつばひかる、なるほど、こりや私が誤つた。そしたら、其百人一首は、何のこつちやエ」
 山「「から」いふ詞の譯さ。能お聞よ。百人一首の歌に、文屋康秀、吹からに秋の草木のしほるればトあるよ。ソレ吹からにネ、よしかへ。吹ゆゑにといふことを、吹からに、さ。なんぼ上方で、さかいと云ても、吹さかい秋の草木のしほるればとは、詠はいたしやせん」
 山「なる程、さう聞さや、おまへのがほんまに尤らしいが、ハテ云や何でもいはれるはいな」
 山「大願成就でもなんでも、利口をじこうといつたり、立派をぎつば、狐をけつねといふより能のさ。五音相通とか何とかが、かなつてゐるから、むりじやアねへと、此中も博識な人が、おはなしだつけ。延引だの、観音だのと、あいうえおの上へむの字が乗れば、五音相通で、
 恩愛・観音・延引

善悪などいふものだ、能く教なすつたから、今度おめへが江戸詞を笑つたら、一番しめてやらうと思つて、待てゐたはな。」

かみ「さうかいな。そんならまア、かんのんも能はト、からも能はト。扱また關東べいじや、どうしべい、斯しべい、行べい、歸るべいとは、扱見とうむないナア」山「それもネ、萬葉集とやら、その外神さまの時分の本にネ、べい〜詞があるさ。可といふことで、行べい、歸るべいは、可行情歸といふ詞で、いまでも萬葉とやらの歌よみは、べい詞を遣ふさうさ。この事も、一緒に聞いて置いて、内へ書付て置たから、その歌や詞を來て見なせへ。鄙言の、何ちふことだの、角ちふことだの、といふのも、ちふとは『といふ』といふ詞を詰たので、古い詞だから、頼もしいとお云だよ。」かみ「なんのいな、べい〜詞が、何で譯があるぞいな」山「譯がなくツてさ。うそなら、わつちが内へ來て書付を見なせへ」かみ「ハアちと見よかい

ナ。何なと賭にせうかい。私がまけたらナ、醜なと、大福餅なと、立ちよはいナ。おまへ又何なと立さんせ」山「立るとはへ」かみ「振舞の事ちや」山「おどるのか」かみ「さいな」山「ム、わつちが負たら、鱧を貳朱はづまう」かみ「こりや能はいな」山「ア、いた〜〜、ヲ、いたいよ。おめへはまア調子に乗つて背中を痛くおこすりだよ。モウよいよ」かみ「ハ、拍子にかゝつて、ヲ、しんど」山「サアおまへの背中をお出し」かみ「又遺趣がへしにえらいことすまいぞや。是どうじやいな、お山さん。アいた、アいたア毒性なお方なア。いつこ面倒なら放ておかんせ、アいた、アいた。何しいじやいな。痛さがたまらんはいナ。灸があるさかい、味能うながしいな。アいた、アいた〜〜〜〜〜」

後
篇

枕草紙

春はあけぼの

春は曙。やう／＼しろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の、ほそくたなびきたる。夏はよる。月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる、雨などのふるさへをかし。秋は夕ぐれ。夕日花やかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥の寝どころへゆくとして、三つ四つ二つなど、飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはて、風のおと蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて。雪のふりたるはいふべきにもあらず、霜などのい

と白く、又さらでも、いと寒きに、火などいそぎおこして、炭もて渡るもいとつきんし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃火桶の火も白き灰がちになりぬるは、わろし。(第一段)

正月一日

正月一日は、まいて空のけしきうらくと、めづらしく霞みこめたるに、世にありとある人は、姿かたち、心ことにつくろひ、君をもわが身をも祝ひなどしたるさま、ことにをかし。

七日は、雪間の若菜青やかにつみ出でつゝ、例はさしもさる物、目近からぬ所にもて騒ぐこそをかしけれ。白馬見むとて、里人は、車清けにしたてて見にゆく。中の御門のとじきみひき入るゝほど、かしらども一ところにまろびあひて、刺櫛も落ち、用意せねば折れなどして、笑ふも亦をかし。

左衛門の陣などに、殿上人あまた立ちなどして、舍人の弓ども取りて、馬ども驚かして笑ふを、はつかに見入れたれば、立部などの見ゆるに、主殿司、女官などの、行きちがひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人、九重をかく立ちならすらむなど思ひやらるゝに、うちにも、見るはいとせばきほどにて、舍人が顔のきぬもあらはれ、白き物のゆきつかぬ所は、まことに黒き庭に、雪のむら消えたるこゝちして、いと見ぐるし。馬のあがり騒ぎたるもおそろしく覺ゆれば、引き入られて、よくも見やられず。

八日、人々よろこびして走りさわぎ、車の音も、常よりは、ことに聞えてをかし。

十五日は、もち粥の節供まゐる。粥の木ひきかくして、家の御達、女房などのうかゞふを、打たれじと用意して、常にうしろを心づかひしたるけしきもをかしきに、いかにしてけるにかあらむ、打ちあてたるは、いみじ

う興ありとうち笑ひたるも、いとほえんし。ねたしと思ひたる、ことわりなり。こぞより、あたらしうかよふ婿の君などの、内へまゐるほどを、こゝろもとなく、ところにつけて、われはと思ひたる女房ののぞき、奥のかたにたゞずまふを、前に居たる人は心得て笑ふを、「あなかま、く」とまねきかくれど、君見知らず顔にて、おほどかにて居給へり。「こゝなる物とり侍らむ」などいひ寄り、はしり打ちて逃ぐれば、あるかぎり笑ふ。男君もにくからず、あいぎやうづきて笑みたる。ことに驚かず、顔すこし赤みて居たるもをかし。又、かたみに打ちて、男などさへぞ打つめる。いかなる心にかあらむ、泣き腹だち、打ちつる人をのろひ、まがくしくいふもをかし。内わたりなどやむごとなきも、今日は、みな亂れて、かしこまりなし。

除目のほどなど、内わたりは、いとをかし。雪降りこほりなどしたるに、

申文もてありく四位五位、若やかにこゝちよげなるは、いとたのもしげなり。老いて頭白きなどが、人にとかくあないいひ、女房の局によりて、おのが身のかしこきよしなど、心をやりて説き聞かするを、若き人々は、まねをし笑へど、いかでか知らむ。「よきに奏し給へ。啓し給へ。」などいひても、得たるはよし、得ずなりぬるこそ、いとあはれなれ。

三月三日は、うらくとどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる。柳など、いとをかしこそ更なれ。それもまだ、まゆに籠りたるこそをかしけれ。ひろごりたるはにくし。花も散りたるのちは、うたてぞ見ゆる。おもしろく咲きたる櫻を、長く折りて、おほきなる花瓶にさしたるこそをかしけれ。櫻の直衣に、出桂して、まらうどにもあれ、御せうとの君達にもあれ、そこ近くゐて、物などうちいひたる、いとをかし。そのわたりに、鳥蟲のひたひつき、いとうつくしうて飛びありく、いとをかし。

祭の頃は、いみじうをかし。木々のこの葉、まだしげうはなうて、わかやかに青みたるに、霞も霧もへだてぬ空のけしきの、何となくそとろにかしきに、すこし曇りたる夕つかた、よるなど、忍びたる時鳥の、遠うそら耳かと覺ゆるまで、たどたどしきを聞きつけたらむ、何ごこちかはせむ。祭近くなりて、青朽葉、二藍などの物どもおしまきつゝ、細櫃の蓋に入れ、紙などにけしきばかり包みて、行きちがひもてありくこそをかしけれ。すそ濃、むら濃、巻染など、常よりもをかしう見ゆ。わらべの頭ばかり洗ひ繕ひて、なりは皆なえ綻び、うち亂れかゝりたるもあるが、けいし、履などの「緒すげさせ。裏をさせ」などもて騒ぎ、いつしかその日にならむといそぎ走りありくもをかし。あやしう跳りてありく者どもの、さうぞきたてつれば、いみじく、ぢやうざといふ法師などのやうに、練りさまよふこそをかしけれ。ほどほどにつけて、親をばの女、姉などの、供してつ

くろひありくもをかし。(第三段)

すさまじきもの

すさまじきもの、晝ほゆる犬。春の網代。三四月の紅梅のきぬ。ちごのなくなりたるうぶ屋。火おこさぬ火桶、炭櫃。牛にくみたる牛飼。博士のうち續きに、女子うませたる。方たがへにゆきたるに、あるじせぬ所。まして節分はすさまじ。ひとの國よりおこせたる文の物なき。京のをも、さこそは思ふらめ。されどそれはゆかしき事をも書きあつめ、世にある事を聞けばよし。人の許にわざと清げに書きたてゝやりつる文の、かへりごと見む、今はきぬらむかし、怪しく遅きと待つほどに、ありつる文の結びたるも、立文も、いときたなげに持ちなし、ふくだめて、うへに引きたりつる墨さへ消えたるを、「おはしまさざりけり」とも、もして「物忌とて取り

入れず「などいひてもて歸りたる、いとわびしく、すさまじ。

又必ずくべき人の許に、車をやりて待つに、入りくる音すれば、さななり、と人々出でて見るに、車やどりに入りて、轅ほうとうちおろすを、「いかなるぞ」と問へば、「今日はおはしまさず」、「渡り給はず」とて、牛のかぎりひき出でいぬる。又家ゆすりて取りたる婿の、こずなりぬる、いとすさまじ。さるべき人の、宮仕するがりやりて、いつしかと思ふも、いとほいなし。ちごの乳母の、只あからさまとて、いぬるを、もとむれば、とかくあそばし慰めて、「とくこ」といひやりたるに、「こよひはえ參るまじ」とて、返しおこせたる。すさまじきのみにもあらず、にくさわりなし。

験者の物のけてうずとて、いみじうしたり顔に、獨鈷や珠數など持たせて、せみ聲にしぼりいだし、讀みぬたれど、いさゝかさりげもなく、護法もつかねば、集りて念じ居たる男も女も、あやしと思ふに、時のかはるま

で讀み困じて、「更につかず、たちね」とて、珠數取り返して、あれと、「験なしや」とうちいひて、額よりかみさまにかしらさぐりあけて、欠伸をおのれうちして、よりふしぬる。

除目につかさ得ぬ人の家。今年はかならずと聞きて、はやうありし者どもも、ほか／＼なりつる、片田舎にすむ者どもなども、皆集りきて、出でいる車の轅もひまなく見え、物まうでする供にも、我も／＼と參りつかうまつり、物くひ酒飲み、の／＼しりあへるに、はつる曉まで、門叩く音もせず、怪しなど耳立て、聞けば、ささおふ聲して、上達部など皆出で給ふ。物ぎいに、よひより寒がりわな／＼き居りつる下衆をのこなど、いと物憂げに、あゆみくるを、をる者どもは、問ひだにもえ問はず、外よりきたる者どもなどぞ「殿は何にかならせ給へる」など問ふ。いらへには、「何の前司にこそは」と必ずいらふる。誠に頼みける者は、いみじうなげかし、と思ひ

たり。つとめてになりて、ひまなく居りつる者も、やうく一人二人づゝすべり出でぬ。ふるき者の、さもえゆき離るまじきは、來年の國々を、手を折りて數へなどして、ゆるぎありきたるも、いみじういとほしう、すさまじげなり。

よろしう詠みたりとおもふ歌を、人のもとに遣りたるに、返しせぬ。懸想文はいかゞはせむ。それだに折をかしうなどある、返事せぬは心おとりす。又さわがしう時めかしき處に、うちふるめきたる人の、おのがつれづれといとまあるまゝに、昔おぼえて、ことなる事なき歌よみしておこせたる。物のをりの扇、いみじと思ひて、心ありと知りたる人にいひつけたるに、その日になりて、思はずなる繪などかきて得たる。産養、馬のはなむけなどの使に、祿など取らせぬ。はかなき藥玉・卵槌など、もてありく者などにも、なほ必ず取らすべし。思ひかけぬことに得たるをば、いと興あ

りと思ふべし。これはさるべき使ぞと、心ときめきして來たるに、たゞなるは誠にすさまじきぞかし。

婿とりて、四五年までうぶ屋のさわぎせぬ所。しはすのつごもりの長雨。「ひと日ばかりの精進のげたい」とやいふべからむ。(第二十一段)

鳥 は

鳥は、ことどころの物なれど、鸚鵡いとあはれなり。人のいふらむことを、まねぶらむよ。時鳥・水鶏・鳴・みこ鳥・ひわ・ひたき。山鳥は、友をこひて鳴くに、鏡を見すれば慰むらむ、いと哀なり、谷隔てたる程などいと心ぐるし。鶴はこちたきさまなれど、鳴く聲雲居まで聞ゆらむ、いとめでたし。かしら赤き雀。班鳩の雄鳥。たくみ鳥。鷺は、いと見る目も見ぐるし。まなこ居などもうたて、よろづになつかしからねど、ゆるぎの森にひ

とりは寝じと争ふらむこそ、をかしけれ。はこ鳥。水鳥は鴛鴦いとあはれなり、かたみに居がはりて、羽の上の霜を拂ふらむなど、いとをかし。都鳥。川千鳥は友まどはすらむこそ。雁の聲は遠く聞えたるあはれなり。鴨ははねの霜うち拂ふらむと思ふに、をかし。

鶯は、文などにもめでたきものに作り、聲よりはじめて、様かたちも、さばかりあてに美しきほどよりは、九重のうちに鳴かぬぞ、いとわろき。人のさなむあるといひしを、さしもあらじと思ひしに、十年ばかりさぶらひて聞きしに、誠に更に音もせざりき。さるは竹も近く、紅梅もいとよく通ひぬべきたよりなりかし。まかで、聞けば、あやしき家の、見どころもなき梅などには、花やかにぞなく。よる鳴かぬもいぎたなき心ちすれども、今はいかげむ。夏秋の末まで、老聲に鳴きて、蟲喰など、ようもあらぬ者は、名をつかけかへていふぞ、くち惜しくすぎき心ちする。それも雀

などのやうに、常にある鳥ならば、さも覺ゆまじ。春鳴くゆゑこそはあらめ。年立ち返るなど、をかしきことに、歌にも文にも作るなるは、なほ春のうちならましかば、いかにをかしからまし。人をも人げなう、世のおほえあなづらはしうなりそめにたるをば、謗りやはする。鶯鳥などのうへは見入れ聞き入れなどする人、世になしかし。さればいみじかるべきものとなりたればと思ふに、心ゆかぬ心ちするなり。祭のかへさ見るとて、雲林院・知足院などの前に、車を立てたれば、時鳥も忍ばぬにやあらむ鳴くに、いとようまねび似せて木高き木どもの中に、もろ聲に鳴きたるこそ、さすがにをかしけれ。

時鳥は、なほ更にいふべき方なし。いつしかしたり顔にも聞え、歌に、卯の花花橋などにやどりをして、はたがくれたるも、ねたげなる心ばへなり。五月雨のみじか夜に寢覺をして、いかで人よりさきに聞かむと待たれ

て、夜深くうち出でたる聲の、らう／＼じう愛敬づきたる、いみじう心あ
くがれ、せむ方なし。六月になりぬれば、音もせずなりぬる。すべていふ
もあろかなり。夜鳴くもの、すべていづれも／＼めでたし。稚兒どものみ
ぞ、さしもなき。(第三十八段)

蟲 は

蟲は鈴蟲。松蟲。促蟻。蟋蟀。蝶。われから。ひをむし。螢。蓑蟲、い
とあはれなり。鬼のうみければ、親に似て、これもあそろしき心あらむと
て、親のあしきぬひき着せて、「いま秋風吹かむをりにぞこむずる。待て
よ」といひて、にげていにけるも知らず。風のおと聞き知りて、八月ばか
りになれば、ち／＼よくとはかなげになく、いみじうあはれなり。ひぐら
し。ぬかづき蟲、またあはれなり。さる心に道心おこして、つきありくら

む。又おもひかけず、暗き所などにほとめきたる、聞きつけたるこそをか
しけれ。蠅こそにくきもの、うちに入れつべけれ。愛敬なくにくきもの
は、人人しう書き出づべきもの、やうにあらねど、よろづの物にあ、顔な
どにぬれたる足して居たるなどよ。人の名につきたるは、いとらとまし。
夏蟲いとをかし、らうたげなり。火近うとりよせて、物語など見るに、
草子のうへなどに飛びありく、いとをかし。蟻はにくけれどかるびいみじ
うて、水のうへなどを、たゞ歩みありくこそをかしけれ。(第四十段)

ありがたきもの

ありがたきもの舅に譽めらるゝ婿。又、姑に思はるゝよめの君。物よく
抜くるしろがねの毛抜。主そしらぬ人のずさ。つゆの癖かたはなくて、か
たち心ざまもすぐれて、世にあるほど、いさゝかのきずなき人。おなじ處

に住む人の、かたみにはぢかはし、いさゝかのひまなく用意したりと思ふが、遂に見えぬこそかたけれ。物語集など書きうつす本に墨つけぬこと。よき草子などは、いみじく心して書けども、必ずこそきたなげになるめれ。男も、女も、法師も、ちぎり深くかたらふ人の、未まで中よき事かたし。つかひよきずんざ。搔練うたせたるに、あなめでたと見えておこす。(第六十二段)

頭の中將

頭の中將の、そゞろなる虚言をきいて、いみじう言ひおとし、「何しに人と思ひけむ」など、殿上にもいみじくもなむの給ふと聞くに、恥しけれど、「誠ならばこそあらめ、おのづから聞きなほしたまひてむ」など笑ひてあるに、黒戸の方へなど渡るにも、聲などする折は、袖をふたぎてつ

ゆ見おこせず、いみじう憎みたまふを、とかくも言はず、見も入れて過ぐす。

二月つごもりがた、雨いみじう降りて、つれづれなるに、御物忌に籠りて、「さすがにさうくしくこそあれ、物や云ひにやらまし、となむの給ふ」と、人々語れど、「よにあらじ」などいらへてあるに、一日しもに暮して参りたれば、夜のおとゞに入らせ給ひにけり。

長押のしもに、火近く取り寄せて、さしつどひて、扁をぞつぐ。「あなうれしや、とくおはせ」など見つけていへど、すさまじき心地して、何しにのぼりつらむ、と覺えて、炭櫃のもとに居たれば、又そこに集り居て、物などいふに、「なにがしさぶらふ」といと花やかにいふ。あやしく、いつの間に何事のあるぞ」と問はすれば、主殿司なり、「たゞこゝに人傳ならで申すべき事なむ」と言へば、さし出で、問ふに、「これ頭の中將殿の

奉らせ給ふ。御返りとく」と云ふに、いみじく憎みたまふを、いかなる御文ならむ、と思へど、只今いそぎ見るべきにあらねば、「いね、今聞えむ」とて、懐に引入れて入りぬ。

なほ人の物いふ聞きなどするに、すなはち立ち歸りて、「さらばそのありつる文を賜りて來、となむ仰せられつる、とくとく」と云ふに、あやしきいせの物語なりや、とて見れば、青き薄様に、いと清げに書き給へるを心ときめきしつるさまにもあらざりけり。「蘭省の花の時錦帳の下」と書きて、「末はいかにく」とあるを如何がはすべからむ、御前のおはしまさば、御覽せさすべきを、これが未知り顔に、たどくしき眞名に書きたらむも見苦し、など思ひまはす程もなく、せめまどはせば、たゞその奥に、炭櫃の消えたる炭のあるして「くさのいほりをたれかたづねむ」と書きつけて取らせつれど、返りごともいはず。

みな寢て、つとめていとく局におりたれば、源少將の聲して、「草の庵やあるく」とおどろくしう問へば、「などてか、さ人げなき者はあらむ。玉の臺求め給はましかば、いらへてまし」と言ふ。あな嬉し。しもにありけるよ。上まで尋ねむとしつるものを」とて、「よべありしやう、頭の中將の宿直所にて、少し人々しき限り、六位まで集りて、よろづの人の上、昔今と語り出でいひし序に、なほこの者、むげに絶えはて、後こそ、さすがにえあらね、若しいひ出づる事もやと待てど、聊か何とも思ひたらず、つれなきがいと妬きを、こよひ悪しとも善しとも定めきりて止みなむかして、皆言ひ合せたりし事を、只今は見るまじきとて入り給ひぬ、とて主殿司來りしを、又追ひかへして、たゞ袖をとらへて、東西をさせず、乞ひ取りもてこずば、文を返し取れと戒めて、さばかり降る雨のさかりに遣りたるに、いととく歸り來たり、これとて差し出でたるが、ありつる文

なれば、返してけるか、と打見るに、あはせてをめければ、怪し如何なる事ぞとて、皆寄りて見るに、いみじき盗人かな、なほえこそ棄つまじけれ、と見さわぎて、これが本附けてやらむ、源少將附けよ、などいふ。夜更るまで附け頼ひてなむ止みにし。此事必ず語り傳ふべき事なり、となむ定めし」と、いみじく側痛きまで言ひきかせて、「御名は、今は草のいほりとなむ附けたる」とて、急ぎ起ち給ひぬれば、「いとわろき名の、末まであらむこそ口惜しかるべけれ」といふほどに、

修理の亮則光、「いみじき悦び申しに、うへにやとて参りたりつる」と言へば、「なぞ、司召ありとも聞えぬに、何になり給へるぞ」と言へば、「いで、誠に嬉しきことのよべ侍りしを、心もとなく思ひ明してなむ、かばかり面目ある事なかりき」とて、始めありける事ども、少將の語りつる同じ事どもをいひて、「この返りごとに隨ひて、さる者ありとだに思はじ、

と頭の中將の給ひしに、たゞに來たりしは、なか／＼よかりき。もて來たりしたびは、如何ならむ、と胸つぶれて、誠にわろからむは、せうとの爲もわろかるべしと思ひしに、なのめにだにあらず、そこの人の譽め感じて、せうとこそ聞け、との給ひしかば、下心にはいと嬉しけれど、さやうの方には、更にえさぶらふまじき身になむ侍る、と申し、かば、こと加へ聞き知れとはあらず。たゞ人に語れとて聞かするぞ、との給ひしなむ、少し口惜しきせうとの覺えに侍りしかど、これが本つけ試みるにいふべきやうなし。殊に又これが返しをやすべきなど言ひ合せ、わろき事いひては、なか／＼ねたかるべしとて、夜半までなむおはせし。これ身の爲にも、人の爲にも、さていみじきよろこびには侍らずや。司召に、少々のかさ得て侍らむは、何とも思ふまじくなむ」と言へば、げに數多してさる事あらむとも知らず、妬くもありけるかな。是になむ胸つぶれて覺ゆる。

このいもうとせうとといふ事をば、上まで皆しろしめし、殿上にも、つかさ名をば言はで、せうととぞ附けたる。

物語などしてゐたる程に、「まづ」と召したれば、参りたるに、此事仰せられむとてなりけり。「上の渡らせ給ひて、語り聞えさせ給ひて、をのこども、皆扇に書いてもたる」と仰せらるゝにこそ、淺ましう、何の言はせける事にか、と覺えしか。さて後に、袖几帳など取りのけて、思ひなほり給ふめりし。(第七十段)

雪の山

さてしはすの十餘日のほどに、雪いと高うふりたるを、女房どもなどして、物の蓋に入れつゝ、いと多くおくを、女房おなじくは、庭にまことの山を作らせ侍らむ」とて、侍召して、「仰ごとにて」といへば、集りてつく

るに、主殿司の人にて、御きよめに参りたるなども、皆よりて、いと高くつくりなす。宮づかさなど参り集りて、言くはへことにつくれば、所の衆三四人参りたる。主殿司の人も、二十人ばかりになりけり。里なる侍召しにつかはしなどす。「今日この山つくる人には、祿賜はすべし。雪山に参らざらむ人には、同じからずとゞめむ」などいへば、聞きつけたるは惑ひまゐるもあり。里遠きはえ告げやらず。作りはてつれば、宮づかさ召してきぬ二ゆひとらせて、縁に投げ出づるを、ひとつづつ取りによりて、をがみつゝ腰にさして、皆まかでぬ。袍など着たるは、かたへさらで狩衣にてぞある。宮「これいつまでありなむ」と、人々にのたまはするに、人々「十日はありなむ」人々「十餘日はありなむ」などたゞこの頃の程を、あるかぎり申せば、宮「いかに」と問はせ給へば、清「正月の十五日までさぶらひなむ」と申すを、御前にもえさはあらじと思すめり。女房などは、すべて

「年の内、晦日まであらじ」とのみ申すに、あまり遠くも申してけるかな、げにえしもさはあらざらむ。朔日などぞ申すべかりけると、下には思へど、さばれさまでなくと、言ひそめてむことはとて、かたうあらがひつ。

二十日のほどに、雨など降れど、消ゆべくもなし。たけぞ少しおとりもてゆく。清「白山の観音、これきやさせ給ふな」と祈るも物ぐるほし。さてその山つくりたる日、式部丞忠隆、御使にて参りたれば、しとねさしいだし、物などいふに、忠隆「けふ雪山つくらせ給はぬ所なむなき。御前のつぼにも作らせ給へり。春宮、弘徽殿にも作らせ給へり。京極殿にも作らせ給へり」などいへば、

こゝにのみめづらしと見る雪の山ところとところにふりにけるかなと傍なる人していはすれば、たび／＼かたぶきて、忠隆「返しはえ仕うまつ

りけがさじ。あされたる御簾の前にて、人にかたり侍らむ」とてたちにき。歌はいみじく好むと聞きしに、あやし。御前にきこしめして、「いみじくよくとぞ思ひつらむ」とぞ給はする。晦日がたに、少しちひさくなるやうなれど、なほいと高くてあるに、晝つかた、縁に人々出で居などしたるに、常陸の介出できたり。女房「などいと久しく見えざりつる」といへば、尼「なにか、いと心うき事の侍りしかば」といふに、女房「いかに、何事ぞ」と問ふに、尼「なほかく思ひ侍りしなり」とて、ながやかによみ出づ。

うらやまし足もひかれずわたつうみのいかなるあまに物賜ふらむとなむ思ひ侍りし」といふを、にくみ笑ひて、人の目も見いれねば、雪の山にのぼり、かゝづらひありきていぬる後に、右近の内侍に、「かくなむ」と言ひやりたれば、右近「などか人そへて、こゝには賜はせざりし。かれがはしたなくて、雪の山までかゝりつたひけむこそ、いと悲しけれ」とある

を、又笑ふ。雪山はつれなくて、年もかへりぬ。

ついたちの日、又雪多くふりたるを、うれしくも降り積みたるかなと思ふに、宮「これはあいなし。はじめのをばおきて、今のをばかき棄てよ」と仰せらる。うへにて局へいと疾うおるれば、侍の長なるもの、ゆの葉の如くなる宿直衣の袖のうへに、青き紙の松につけたるをおきて、わなゝき出でたり。清「そはいづこのぞと」問へば、侍ノ長「齋院より」といふに、ふとめでたく覺えて、取りて参りぬ。まだおほとのごもりたれば、身屋にあたりたる御格子を、ごばんなどかきよせて、一人ねんじてあぐるいとおもし。片つかたなればひしめくに、おどろかせ給ひて、宮「などさはする」との給はすれば、清「齋院より御文のさぶらはむには、いかでか急ぎあげ侍らざらむ」と申すに、宮「げにいと疾かりけり」とて起きさせ給へり。御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卯槌二つを、卯杖のさまに、かしら

包みなどして、山たちばな、ひかけ、山菅などうつくしげに飾りて、御文はなし、たゞなるやうあらむやはとて御覽すれば、卯槌の頭つゝみたるちひさき紙に、

山とよむ斧のひさきをたづねればいはひの杖の音にぞありける

御返しか、せ給ふほども、いとめでたし。齋院には、これより聞えさせ給ふ。御返しも、なほ心ことにかきけがし、多く御用意見えたり。御使に、白き織物の單衣、蘇枋なるは梅なめりかし。雪の降りしきたるに、かづきて参るもをかしう見ゆ。このたびの御返事を、知らずなりにしこそくちをしかりしか。

雪の山は、まことに越のにやあらむと見えて、消えげもなし。くろくなりて、見るかひもなきさまぞしたる。勝ちぬる心ちして、いかで十五日待ちつけさせむと念ずれど、人々「七日をだにえすぐさじ」となほいへば、い

かでこれ見はてむと、皆人おもふほどに、俄に三日うちへ入らせ給ふべし。いみじうくちをし、この山のはてを知らずなりなむことと、まめやかに思ふほどに、人も「げにゆかしかりつるものを」などいふ。御前にも仰せらる。同じくいひあて、御覽せさせむと思へるかひなければ、御物の具はこび、いみじうさわがしきにあはせて、木守といふ者の、築土のほどに廂さして居たるを、縁のもと近く呼びよせて、清「この雪の山いみじくまもりて、わらはべなどに踏みちらさせこぼたせで、十五日までさぶらはせ。よく／＼守りて、その日にあたれば、めでたき祿たまはせむとす。わたくしにも、いみじきよろこびいはむ」など語ひて、常に臺盤所の人、下衆などにくるゝを乞ひて、くだものや何やと、いと多く取らせたれば、うち笑みて、木守「いとやすきこと、たしかに守り侍らむ。わらはべなどぞのぼり侍らむ」といへば、清「それを制して聞かさらんものは、事のよしを

申せ」などといひ聞かせて、入らせ給ひぬれば、七日までさぶらひて出でぬ。そのほども、これがうしろめたきまゝに、おほやけ人、すまし、をさめなどして、絶えずいましめにやり、七日の御節供のおろしなどをやりたれば、拜みつることなど、かへりては笑ひあり。

里にても、あくるすなはち、これを大事にして見せにやる。十日のほどには、使「五日まつばかりあり」といへば、うれしく思ふに、十三日の夜、雨いみじく降れば、これにぞ消えぬらむと、いみじうくちをし。今ひと日二日もまちつけでと、よるも起き居てなげけば、聞く人も物ぐるほしと笑ふ。人の起きて行くに、やがて起きいで、下衆おこさするに、更に起きねば、にくみ腹だたれて、起きいでたるを遣りて見すれば、「わらふだばかりになりて侍る。木守いとかしこう、わらはべも寄せで守りて、明日あさまでもさぶらひぬべし。木守「祿賜はらむ」と申す」といへば、いみじくうれし

く、いつしか明日にならば、いと疾う歌よみて、物に入れて參らせむと思ふも、いと心もとなうわびしう、まだくらきに、大きな打櫃などもたせて、清「これにしるからむ所、ひたもの入れてもてこ。きたなげならむはかき捨て、」など、いひく、めて遣りたれば、いと疾く、もたせてやりつる物ひきさげて、使「はやう失せ侍りにけり」といふに、いとあさまし。をかしうよみ出でて、人にもかたり傳へさせむと、うめき誦じつる歌も、いとあさましくかひなく、「いかにしつるならむ。昨日さばかりありけむものを、夜のほどに消えぬらむこと」といひくんずれば、使「木守が申しつるは、「昨日いと暗うなるまで侍りき。祿を賜はらむと思ひつるものを、賜はらずなりぬる事」と、手をうちて申し侍りつる」といひさわぐに、うちより仰言ありて、宮「さて雪は今日までありつや」との給はせられたれば、いとねたくくちをしけれど、清「年のうち朔日までだにあらじ」と、人々啓

し給へし、昨日の夕暮まで侍りしを、いとかしこしとなむ思ひ給ふる。今日までは、あまりの事になむ。夜のほどに、人のにくがりて、取りすて侍るにやとなむ推しはかり侍る」と啓せさせ給へ」と聞えさせつ。

さて二十日に參りたるにも、まづこの事を、御前にてもいふ。皆消えつとて、蓋のかぎりひきさげてもて來りつる、帽子のやうにて、すなはちもて來りつるが、あさましかりし事、物の蓋に、小山うつくしう作りて、白き紙に、歌いみじく書きて、參らせむとせし事など啓すれば、いみじく笑はせ給ふ。御前なる人々も笑ふに、宮「かう心に入れて思ひける事を、たがへたれば罪得らむ。まことには、四日の夕さり、侍どもやりて、取りすてさせしぞ。かへりごとに、いひあてたりしこそをかしかりしか。その翁出できて、いみじう手をすりていひけれど、「仰言ぞ。かのよりきたらむ人に、かうきかすな。さらば屋うちこぼたせむ」といひて、左近のつかさの、

南の築土の外に皆取りすて、けり。「いと高くて、多くなむありつる」といふなりしかば、げに二十日まで待ちつけて、ようせずは、今年の初雪にも降りそひなまし。うへにも聞し召して、「いと思ひよりがたくあらがひたり」と、殿上人などにも仰せられけり。さてもかの歌のかたれ。今はかくいひあらはしつれば、同じごと勝ちたり。かたれ」など、御前にものはせ、人々もの給へど、「なにせむにか、さばかりの事を承りながら啓し侍らむ」など、まめやかに心うがれば、うへも渡らせ給ひて、「まことに年ごろは、多くの人なめりと見つるを、これにぞあやしく思ひし」など仰せらるゝに、いとどつらく、うちも泣きぬべき心地ぞする。清「いであはれ、いみじき世の中ぞかし。のちに降り積みたりし雪を、うれしと思ひしを、宮「それはあひなしとて、かき捨てよ」と仰ごと侍りし」と申せば、「げに勝たせじとおぼしけるならむ」と、うへも笑はせおはします。(第七十五段)

五月の御精進の程

五月さつきの御さうじのほど、職におはしますに、塗籠の前、二間なる所を、殊にしつらひしたれば、例ざまならぬもをかし。朔日より雨がちにて曇りくらす。清「つれづれなるを、時鳥の聲尋ねありかばや」といふを聞きて、われもくと出でたつ。賀茂の奥に、なにがしとかや、たなばたの渡る橋にはあらで、にくき名ぞ聞えし。「そのあたりになむ、日ごとに鳴く」と人のいへば、「それはひぐらしなり」といらふる人もあり。そこへとて、五日のあした、宮づかさ、車の事いひて、北の陣より、さみだれはとがめなきものぞとて、さしよせて、四人ばかりぞ乗りて行く。うらやましがりて、女房「今一つしておなじくは」などいへど、宮「いな」と仰せらるれば、聞きも入れず、なさけなきさまにて行くに、馬場といふ所にて、人多くさわ

ぐ。「何事するぞ」と問へば、車副「手つがひにてまゆみ射るなり。しばし御覽じておはしませ」とて、車とゞめたり。「左近の中少將、皆つき給へる」といへど、さる人も見えす。六位などの立ちさまへば、「ゆかしからぬことぞ。はやく過ぎよ」とて、行きもて行けば、道も祭のころ思ひ出でられてをかし。

かういく所には、明順の朝臣の家あり。「そこもやがて見む」といひて、車よせてありぬ。田舎だち事そぎて、馬のかたかきたる障子、網代屏風、みくりのすだれなど、ことさらに昔の事をうつし出でたり。屋のさまもはかなだちて、はし近くあさはかなれどをかしきに、げにぞかしがましと思ふばかりに、鳴きあひたる時鳥の聲を、くちをしう御前に聞しめさせず、さばかり慕ひつる人々にもなど思ふ。明順「所につけては、かゝる事をなむ見るべき」とて、稻といふもの多く取り出でて、わかき女どものきたなげ

ならぬ、そのあたりの家のげす女などひきゐて来て、五六人してこかせ、見も知らぬくるべきもの、二人してひかせて、歌うたはせなどするを、めづらしくて笑ふに、時鳥の歌よまむなどしつる、忘れぬべし。唐繪にあるやうなる懸盤などして、物くはせたるを、見ゆる人なければ、家あるじ「いとわろくひなびたり。かかる所に來ぬる人は、ようせずはあるじなど、責めいだしてこそ參るべけれ。むげにかくては、その人ならず」などいひてとりはやし、「この下蔵は、手づから摘みつる」などいへば、清「いかで、女官などのやうに、つきなみてはあらむ」などいへば、明順「とりおろして。例のはひぶしにならばせ給へる御前たちなれば」とて、とりおろしまかなひ騒ぐほどに、車副「雨ふりぬべし」といへば、いそぎて車に乗るに、清「さてこの歌は、こゝにてこそ詠まめ」といへば、女房「さばれ道にても」などいひて、卯の花いみじく咲きたるを折りつゝ、車のすだれそばなど